

鹿角市文化財調査資料96

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(25)

2009. 3

鹿角市教育委員会

序

大湯環状列石は、野中堂と万座の二つの環状列石を主体とする縄文時代の遺跡であり、その特異な形態、規模から昭和31年に特別史跡に指定されました。

鹿角市では、市民の誇りでもあるこの貴重な文化遺産を保存するとともに、整備と活用を図るため昭和59年度から発掘調査を、平成10年度から環境整備を実施しております。

発掘調査は史跡北東側の一本木後口地区から始まり、万座環状列石隣接地、野中堂環状列石隣接地と調査区を移して行なわれ、環状列石を中心に掘立柱建物群、土坑・貯蔵穴群、遺物廃棄城が同心円状に分布すること、台地の北縁・北西側に竪穴住居群が分布することを突き止め、環状列石そのものは縄文後期の集団墓であること、それに隣接する掘立柱建物は自然への畏敬の念を表すマツリと祈りの場であること、さらには二つの環状列石は夏至の日没方向を意識した配置であったことが確認されました。

環境整備は史跡の主体である二つの環状列石周辺の整備、史跡のガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の建設に始まり、現在、一本木後口地区を対象として第Ⅲ期環境整備事業が行なわれております。整備が進むにつれ、環状列石を育んだ縄文文化や景観を体感できるようになり、多くの見学者で賑わっております。

また、世界文化遺産記載を目指して北海道・北東北3県並びに12市町で共同提案しておりました「北海道・北東北の縄文遺跡群」は平成20年に文化庁専門分科会の審査・選定、世界文化遺産関連省庁の会議の了承を得て、平成21年1月、ユネスコの世界文化遺産暫定一覧表に「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として正式に記載されました。

さらに、市内に所在する「国重要無形民俗文化財 大日堂舞楽」は、平成21年秋に世界無形遺産としてユネスコへ正式提案される予定であり、鹿角市としては二重の喜びとなりました。

本書は、第25次調査の成果をまとめたもので、環状列石や縄文文化の研究資料としてご活用くだされば嬉しく存じます。

最後に、鹿角市の文化財保護行政に対してご指導とご支援を賜りました特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員の各委員、文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会並びに関係各位に心から感謝申し上げます。

平成21年3月

鹿角市教育委員会

教育長 吉成博雄

例 言

1. 本報告書は、平成20年度に国庫補助金を得て実施した「特別史跡大湯環状列石第25次発掘調査」の成果をまとめたものである。調査の概要については大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」などで発表しているが、本報告書を正式なものとする。

なお、発掘調査については本年度をもって一旦休止することから、北海道・北東北に所在する類似遺跡の事例、大湯環状列石が記載された研究書・雑誌などの文献目録を掲載した。

2. 本報告書の執筆は、生涯学習課 藤井安正、三浦貴子が行った。
3. 土層や土器の色調の記載には「新版 標準土色帖（日本色彩研究所）」を使用した。
4. 本報告書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の「花輪・毛馬内」を使用した。
5. 本報告書に掲載した実測図には縮尺を示したが、写真図版については任意の縮尺とした。
6. 本文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、使用が数度にわたるときは簡略しているものもある。
7. 発掘調査、報告書作成並びに環境整備事業を進めるにあたり下記の方々・機関よりご指導とご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

斎藤 忠、大塚初重、小林達雄、富樫泰時、沢田正昭、熊谷常正、大里勝藏、
安村二郎、小野健吉、本中 眞、坂井秀弥、水ノ江和同、村越 潔、阿部義平、
岡村道雄、藤沼邦彦、工藤雅樹、蒔田明史、葛西 励、遠藤正夫、稲野裕介、
高田和徳、児玉大成、滝本 学、岡田康博、青野友哉、瀬川司男、角田陸志、
駒田 透、佐野忠史、高橋 毅、高橋忠彦、五十嵐一治、新海和広、櫻田 陸、
小林 克、武藤祐浩、榎本剛治、佐藤智雄、板橋範芳、児玉 準、柴田陽一郎、
高橋 学、栗澤光男、利部 修、谷地 薫、秋山邦雄、桐生正一、菅原弘樹、
東本茂樹、加藤朋夏、堀江 格、中嶋友文、高木 晃、石神 敏、黒澤 正、
秋田県埋蔵文化財センター、北秋田市教育委員会、一戸町教育委員会、
滝沢村教育委員会、平川市教育委員会、弘前市教育委員会、青森市教育委員会、
北海道森町教育委員会、小樽市教育委員会

図版・写真図版目次

図版目次

第1図	遺跡の位置と史跡周辺の遺跡	2
第2図	鹿角市内の地形と地質	5
第3図	基本層序図(1)	9
第4図	基本層序図(2)	10
第5図	調査区位置図	13
第6図	トレンチ配置図	14
第7図	出土土器(1)	27
第8図	出土土器(2)	28
第9図	出土土器(3)	29
第10図	史跡周辺の地形	31
第11図	史跡周辺の自然環境	32
第12図	周辺遺跡分布図	34
第13図	野中堂環状列石	38
第14図	万座環状列石	39
第15図	伊勢堂岱遺跡実測図	40
第16図	大森勝山遺跡	41
第17図	太師森遺跡	42
第18図	湯舟沢環状列石	43
第19図	鷺ノ木遺跡	44
第20図	忍路環状列石	45
第21図	天戸森遺跡配石遺構詳	46
第22図	御所野遺跡	47
第23図	小牧野遺跡	48
第24図	高屋館跡(環状列石)実測図	49
第25図	万座・野中堂環状列石	52

写真図版目次

PL1	調査区西側トレンチ	72
PL2	調査区西側・中央トレンチ	73
PL3	調査区東側トレンチ	74
PL4	遺物出土状況	75
PL5	作業風景	76
PL6	出土遺物(1)	77
PL7	出土遺物(2)	78
PL8	出土遺物(3)	79
PL9	大湯環状列石	80
PL10	天戸森遺跡・高屋館跡	81
PL11	伊勢堂岱遺跡・湯舟沢環状列石	82
PL12	御所野遺跡・大森勝山遺跡	83
PL13	小牧野遺跡・鷺ノ木遺跡	84
PL14	忍路環状列石・太師森遺跡	85

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	3
第2表	環境整備の概要(1)	22
第3表	環境整備の概要(2)	23
第4表	今後の環境整備計画	24
第5表	調査概要	35
第6表	周辺遺跡・関連遺跡	
	発掘調査(案)	36

本文目次

序	
例言	
本文目次	
図版・写真図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の環境	
1 史跡の位置と立地	1
2 周辺の地形と地質	1
3 周辺の遺跡	4
4 遺跡の層序	8
第Ⅱ章 調査の概要	
1 調査要項	12
2 調査の目的	15
3 調査の方法	16
4 調査経過	16
第Ⅲ章 環境整備と世界文化遺産	
1 環境整備	18
2 世界文化遺産	25
第Ⅳ章 H ₂ 区の検出遺構と出土遺物	
1 検出遺構	26
2 出土遺物	26
第Ⅴ章 その他の調査	
1 史跡周辺の地形と自然環境	30
2 大湯環状列石関連遺跡の調査	33
第Ⅵ章 分析と考察	38
第Ⅶ章 本調査のまとめ	66
大湯環状列石関係文献目録	67
報告書抄録	

第 I 章 遺跡の環境

1 史跡の位置と立地 (第 1 図)

鹿角市は北東北のほぼ中央に位置し、東に岩手県八幡平市、西に秋田県大館市、北に小坂町、南に仙北市と県境並びに市町境を接している。

石川啄木によって「青垣山を繞らせる天さかる鹿角の国をしのぶれば」と詠まれた鹿角市は、日本海に注ぐ米代川上流域の花輪盆地にあり、稲作や果樹を中心とした農業と十和田八幡平国立公園と湯量豊かな八幡平温泉や大湯温泉を活用した観光を主産業とする都市である。

また、古代から交通の要所となっており、奥州街道が分岐する大館市田代から本市を抜けて盛岡市まで通じる「鹿角街道」は、現在、国道282号線とほぼ同じ道筋となっている。878年の元慶の乱の際、小野春風はこの街道筋を利用し、鹿角（上津野として日本三代実録に登場する）を抜けて秋田城まで鎮静に向かったと伝えられている。

奥羽山脈の懷に抱かれた盆地に発達した鹿角市には、奥羽山脈の四角岳（標高1,003m）に源を発した米代川、十和田湖外輪山を源とした大湯川やその支流などによって形成された舌状台地が多く発達している。

これらの台地上には縄文時代や歴史時代等の416遺跡の所在が確認されており、中でも大湯環状列石は国の代表的な縄文遺跡として昭和31年7月に「特別史跡」に指定されている。

大湯環状列石は、大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食によってつくられた南西方向にのびる全長5.6km、幅0.5～1.0km、標高185m～144mの中通台地（通称 風張台地）のほぼ中央に位置している。

本年度、発掘調査対象地は史跡南端にあたり、公有化以後は雑種地となっている。

2 周辺の地形と地質

周辺の地形と地質については、鹿角市文化財調査資料85『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)』を参考に、その概要を述べる。

鹿角市内の地形 (第 2 図)

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地より構成されている。

東側に連なる山並は800m～1,100mの標高で、四角岳、皮投岳(1,122m)、五ノ宮嶽(1,115m)等を中心とする急峻な壮年期の山である。地質は下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、遠部層等の新第三紀の堆積岩類や火山岩類より構成されている。



第1図 遺跡の位置と史跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	遺構と遺物	時期	収録報告書・備考
1	下内野田	鹿角市十九日大遺中下内野	配石遺構跡	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77 『特別史跡大遺蹟史列石(1)』 2005年
2	鹿角配跡	十和田大遺中下内野	配跡		中世	鹿角市 25 『鹿角の館(3) 遺跡探訪』 1984年
3	小湊水	十和田大遺中下内野	配石遺構跡	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77 『特別史跡大遺蹟史列石(1)』 2005年
4	在藤原一遺塚	十和田大遺中下内野	一遺塚	一遺塚	近世	鹿角市 55 『鹿角市の文化財』 1990年
5	下取洞	十和田山積中ノ平	配石遺構	配石遺構	縄文後期	鹿角市 40 『下取洞遺跡発掘調査報告書』 1990年
6	法津遺跡	十和田内野内下古館	雑居・倉庫	配石遺構・雑居	中世・近世	鹿角市 37 『古館遺跡発掘調査報告書』 1989年
7	竹崎遺跡	十和田毛馬内下古館	雑居	雑居・土坑	中世・近世	鹿角市 36 『竹崎遺跡発掘調査報告書』 1989年
8	大遺蹟史列石	十和田大遺中下内野	遺跡列石	遺跡列石ほか	縄文後期	鹿角市 77 『特別史跡大遺蹟史列石(1)』 2005年
9	塚本A	十和田塚本中下内野	遺跡列石	土器	縄文後期・後期	秋田県 35 『鹿角大遺蹟史列石発掘調査報告書』 1975年
10	丸屋D	十和田塚本中下内野	遺跡列石	土器	縄文	
11	ツツ森配跡	花輪ツツ森	配跡	配跡	中世	鹿角市 30 『鹿角の館(5) ツツ森配跡』 1986年
12	物見原B	十和田物見原中下内野	雑居	配石遺構・土坑	縄文後期・中世	秋田県 354 『物見原遺跡』 2003年
13	物見原B	十和田物見原中下内野	雑居	配石遺構・土坑	縄文後期	鹿角市 79 『物見原B・物見原D(1)』 鹿角市 2005年
14	物見原D	十和田物見原中下内野	雑居・土器	配石遺構・土器	中世	鹿角市 79 『物見原B・物見原D(1)』 鹿角市 2005年
15	赤倉I	十和田物見原中下内野	雑居・土器	土器	中世	鹿角市 『鹿角の館(1)』 1982年
16	赤倉II	十和田物見原中下内野	雑居		中世	
17	鹿角原B	十和田鹿角原中下内野	雑居	配石遺構	中世	本報告書
18	鹿角原I	十和田鹿角原中下内野	遺跡列石	土器・中世	縄文後期	奈良徳信 『秋田県の考古学』 1964年 吉川弘文館
19	小野原配跡	花輪小野原	配跡・雑居	配石遺構・配跡	縄文・中世	鹿角市 44 『小野原遺跡発掘調査報告書』 1992年
20	高野	花輪高野	雑居	配石遺構	中世	秋田県 40 『高野遺跡発掘調査報告書』 1978年
21	藤田平D	花輪藤田平	雑居	配石遺構	縄文後期	秋田県 40 『高野遺跡発掘調査報告書』 1978年に収録
22	鹿角大遺蹟	鹿角市鹿角中下内野	雑居・倉庫	配石遺構・雑居	中世・中世	鹿角市 14 『鹿角大遺蹟跡(1) 発掘調査報告書』 1990年
23	小野原跡	花輪小野原	配跡・雑居	配石遺構・雑居	中世・中世	鹿角市 30 『鹿角の館(5) 小野原跡』 1986年
24	高野山遺跡	花輪高野山	雑居・倉庫	配石遺構・雑居	中世・中世	鹿角市 22 『高野山遺跡発掘調査報告書』 1982年
25	高野山遺跡	花輪高野山	雑居	雑居	中世	鹿角市 30 『鹿角の館(5) 高野山遺跡』 1986年
26	高野山遺跡	花輪高野山	雑居	雑居	中世	鹿角市 30 『鹿角の館(5) 高野山遺跡』 1986年
27	新野川	花輪新野川	雑居	配石遺構	中世	十和田高等学校 『山影 21』 1973年
28	大田原遺跡	花輪大田原	雑居・配跡	配石遺構・雑居	中世・中世	秋田県 172番 『大田原遺跡』 1988年
29	高野山遺跡	花輪高野山	遺跡列石・配跡	遺跡列石・雑居	縄文後期・中世	秋田県 198番 『高野山遺跡』 1990年

注 鹿角市：鹿角市文化財調査資料 秋田県：秋田県文化財調査報告書

第1表 周辺の遺跡一覧表

一方、西側の山地は、標高400m～600m程の丘陵性の穏やかな山並で、東側山脈と同様、下位より新第3紀中新世の大礫層、大滝層、遠部層、櫻内層で構成されている。

鹿角盆地は、東の奥羽山脈、西の高森山地に囲まれ、大小の河川によってつくられた台地・段丘とともに低地がいたるところにみられ、鹿角市北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は奥羽山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴的である。

盆地内の段丘は4段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高270m～330mと傾斜がやや険しい。かなり解析され、主に河成の歪角礫～角礫からなり、風化が著しい。2段目は標高180m～250mで、南部では扇状地状の地形を残すものの、大里地区以北では厚い火砕流堆積物に覆われ、関上面・鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。3段目は標高180m～250mで、主に米代川左岸に沿って尾去沢から松館・荒町にかけて分布している。松館面と呼ばれており、夜明島川、黒沢川等による扇状地の解析された面と考えられている。4段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で「大里面」と呼ばれている。標高は150m～155mと低く、上部は砂礫層を主体としている。

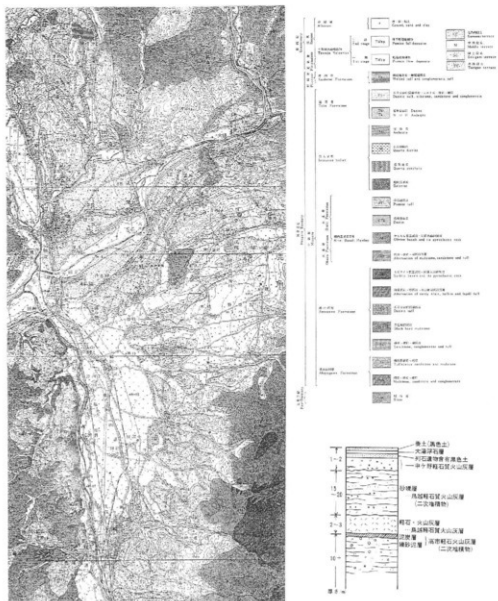
沖積低地は標高100m～120mで、主に砂礫層からなり、花輪や毛馬内の市街地がのる。

発掘調査周辺の地質は大きく分けて、4枚の火山灰層から構成される。最下部は高市軽石質火山灰(25,850±1,360)の二次堆積物で、軽石や砂礫から構成され、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭をはさんで、厚さ2m～3mの鳥越軽石質火山灰層(12,000±250)が重なっている。さらにこの上に水の作用によって堆積した鳥越軽石質火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層がのる。この層の上に風化の進んだ大形の軽石質軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層(86,802±130)が重なっている。

最上部は黒色土層で、黒色土と黒色土の間に十和田a降下火山灰層(大湯浮石層)がみられる。十和田a降下火山灰の降下時期については、これまでの発掘調査例から平安時代中頃、10世紀前半とされていたが、比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、この降下(噴火)時期は延喜15年7月とも言われている。噴火とともに発生した火砕流(毛馬内火砕流)は大湯川・米代川を下り、大館地区・鷹巣地区では家屋(北秋田市 胡松館遺跡)を飲み込みながら、能代平野まで達している。

3 周辺の遺跡(第1図、第1表)

鹿角市は県内でも屈指の遺跡の宝庫として知られており、縄文時代から近世にいたる各時代・各時期の遺跡が416ヶ所も所在する。遺跡の内訳は縄文時代から平安時代の単独又は複合遺跡349ヶ所、中世の遺跡61ヶ所、近世の城郭関係・一里塚3ヶ所、その他3ヶ所である。



第2図 鹿角市内の地形と地質

これらの遺跡は、米代川や大湯川等の大小の河川によって形成された舌状台地上に分布し、特に盆地東側の台地の密集度は高い。

第1図は、中通台地周辺の遺跡分布図である。表記した遺跡はこれまでに発掘調査が実施されたものを抽出したものであり、それ以外の遺跡は表記していない。時代・時期順に表記した遺跡の特徴をまとめる。

図面上で最も古い時期の遺跡は、物見坂Ⅲ遺跡 (No.12・No.13) である。No.12は平成13年度、秋田県教育委員会により、No.13は平成16年度に鹿角市教育委員会によって発掘調査が実施されている。同遺跡名となっているが地形的な要素から本来は二つの遺跡に区分されるべきものと考えられる。秋田県教育委員会の発掘調査によって縄文時代早期の土器の様相が明らかにされ、鹿角市教委の調査によって市内ではじめて早期の竪穴住居1棟、土坑38基が発見され、市内の最も古い時代の集落の様子が明らかにされた。

縄文時代前期・中期を中心として営まれた遺跡は図面内に所在しない。当該時期の遺跡は鹿角市中央部や南部に所在し、代表的な遺跡として前期の清水向遺跡、中期の天戸森遺跡で、いずれも集落跡である。清水向遺跡では円筒下層d式時期の住居2棟、天戸森遺跡からは円筒上層e式〜大木8・9式〜中の平Ⅲ式期の住居が140棟、環状列石の萌芽を示すと思われる半円状に配置された配石遺構群が発見されている。

後期に至ると大規模な遺跡は減少するが、市内各地に分布するようになる。最も代表的な遺跡が特別史跡大湯環状列石であるが、その周辺には環状列石と関連が強いと考えられる下内野Ⅲ遺跡 (No.1)、小清水遺跡 (No.3) があり、さらには米代川を挟んだ高屋集落の後方台地上には高屋館跡の環状列石が所在している。

特別史跡大湯環状列石は、昭和6年の発見以来、調査と研究が継続されている。昭和26年・27年の文化財保護委員会の発掘調査を経て昭和26年には史跡に、昭和31年には特別史跡に指定された。その後昭和48年〜51年にかけて秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会によって周辺遺跡の調査が行われ、環状列石と直接又は間接的に関連する遺跡の範囲が把握された。昭和59年からは鹿角市教育委員会が主体となり調査を行ってきた。発掘調査と平行し、指定地の追加指定事務を行うとともに、平成3年度からは指定地の公有化を進め、全体の約91%が公有化されている。さらに平成10年度に文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業に採択され、環境整備事業が開始された。史跡が余りにも広大であることから第Ⅰ期から第Ⅳ期 (Ⅰ期は5ヶ年) に分けて行うこととし、10年度から第Ⅰ期環境整備、15年度から第Ⅱ期環境整備を行っている。第Ⅰ期の主な整備内容は万座・野中堂環状列石を中心に環状列石の保存処理、遺構や自然環境の復元、仮称体験学習館 (現 大湯ストーンサークル館) 建設を、第Ⅱ期では万座環状列石西側地区の遺構と自然環境の復元を行っている。また、平成17年9月26日、文化庁が「世界遺産暫定

リスト一覧表」への登録遺産を各自自治体に公募したことから、秋田県・北秋田市の共同提案として大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡を「ストーンサークル」として提案書を提出したが暫定リスト登録は見送られた。その後、北海道・北東北3県に所在する縄文時代の代表的な15遺跡を構成資産として、資産を有する4道県12市町が平成19年12月19日に「北海道・北東北の縄文遺跡群」として提案をした。提案書は文化庁内の文化審議会文化財分科会で審査され、その結果は平成20年9月26日に発表され、日本の暫定一覧表に記載すべき資産として選定された。12月15日、外務省で行なわれた世界遺産条約に関連する省庁連絡会議（外務省・文部省・環境庁など）において、ユネスコの世界遺産委員会への追加資産として了承され、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」と改称し、一覧表が提出され、平成21年1月5日付で受理された。

大湯環状列石周辺には環状列石との関連が注目される遺跡がある。同じ台地上に位置する小清水遺跡（No.3）、大湯川を隔てた下内野Ⅲ遺跡である。両遺跡とも環状列石を構築する石材である石英閃緑岩が多数露頭している。平成19年度の鹿角市内遺跡詳細分布調査の対象となった小清水遺跡からは縄文時代後期の住居跡1棟が確認され、大湯環状列石との手がかりを掴むことができた。

また、高屋館跡の環状列石は平成元年に秋田県教育委員会によって発掘調査され、直径約34mの環状列石とそれを取り囲み規則的な配置を示す26棟の孤立柱建物が発見されている。残念なことに未調査部分を残し農道建設に伴い消失したが、平成20年度、鹿角市教育委員会によって詳細分布調査が行なわれ、環状列石の東側一部が確認された。

後期末葉から晩期の遺跡として草木A遺跡（No.9）がある。昭和47年に鹿角広域農道建設に伴い消失する部分の発掘調査が行われた。また、平成18年にはほ場整備事業に伴う範囲確認調査が行われ、後期末葉から晩期にかけての多量の土器とともに石罌戸が確認され、集落の存在が予期できる。

弥生時代の単独遺跡はほとんどなく、発掘調査によって土器片が出土する程度である。最もまとまって遺物が出土した遺跡は物見坂Ⅲ遺跡（No.13）、物見坂Ⅱ遺跡（No.14）で小坂X式土器が出土している。

奈良時代の遺跡は鹿角市北部に集中している傾向にあり、本地域では物見坂Ⅲ遺跡、小枝指館跡（No.19）、源田平遺跡（No.21）がこれに当たる。竪穴住居跡とともに丸底の土師器坏、頸部に段を有する長胴の土師器甕が出土している。

平安時代に入ると遺跡の数は爆発的に多くなり市内全域に分布する。そのほとんどは集落であるが、大湯環状列石ののる台地では集落とともに円墳が造られるようになる。平成17年度に調査を実施した物見坂Ⅱ遺跡では4基の円墳とともに煎手刀2本、銚帯金具が発見された。以前から知られていた枯草坂古墳（枯草坂Ⅰ遺跡 No.18）は本遺跡の南側斜面中段に所在し、台

地先端には大規模な集落が所在し、古墳群の存在が予想される。また枯草坂古墳からは勾玉やガラス玉が出土しており、東京国立博物館、秋田県立博物館、大湯ストーンサークル館で公開展示されている。また、鹿角市史に紹介されている泉森出土の鉄剣は、記載文書を詳細に読み解くと本遺跡の南西側の台地縁に所在する泉森Ⅰ遺跡であることがわかる。泉森は「蝦夷森」が変化したものと考えられることから、鹿角市北半にはエミシ・蝦夷と関連した多くの遺跡がまだ地中に眠っているものと判断される。

中世に入ると鹿角には多くの館跡が構築される。台地の先端を空堀で区切った多郭連続式の形態が特徴となっている。承久の乱後、関東武士団に恩賞として鹿角の土地が与えられ、彼らがこの地を支配するために築いた城館で、館に隣接して集落が発達し「一館一村」の形態をとっている。小枝館跡(№19)は昭和30年東京大学東洋文化研究所によって、平成3年鹿角市教育委員会によって発掘調査が行われ、それぞれの調査によって「館は桃山時代まで存続していたこと」、「館構築の際の残土を利用し、館南側の溼地を埋め立て、平場を作り出していたこと」などが分かっている。

江戸時代に入ると政情も安定し、柏崎館跡(№6)に毛馬内通代官所、花輪館跡(花輪小学校)に花輪通代官所が置かれる。毛馬内地区は鹿角街道(大館市田代～毛馬内～花輪～盛岡)・濁川街道(毛馬内～砦ヶ関)・米溝街道(毛馬内～大湯～八戸)が交差する交通の要所でもあった。

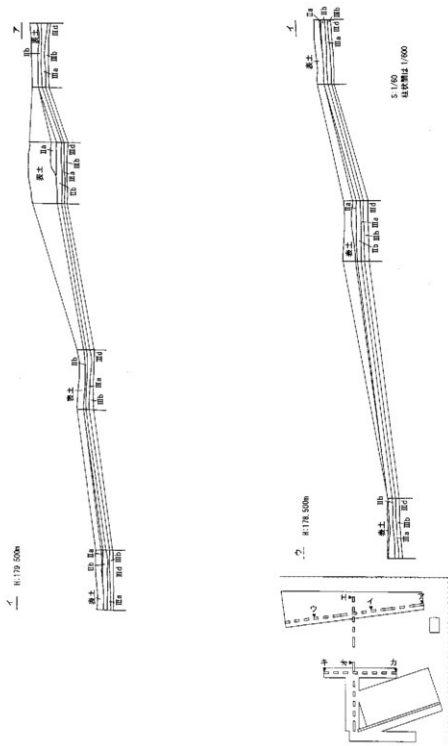
4 遺跡の層序(第3図・第4図)

ここでは、表土から中々野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については先に述べたとおりである。

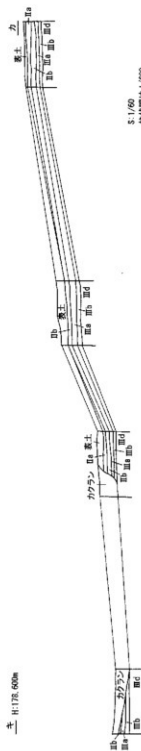
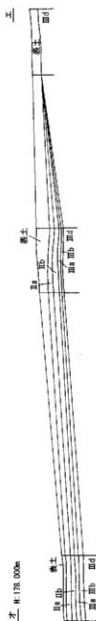
第Ⅰ層は、浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。10cm～20cmの厚さで堆積している。

第Ⅱ層はにぶい黄褐色や明黄褐色の浮石層で、十和田a降下火山灰である。本層は、浮石粒の大きさや色調などから2層(Ⅱa、Ⅱb)に分層される。Ⅱa層は粒子の細かな火山灰層、Ⅱb層は粒径0.5cm～4cmの明黄褐色の浮石層である。本調査区では、後世の擾乱により、Ⅱa層の大部分は消失し、Ⅱb層についても擾乱されている部分が多く、わずか数cmの堆積が認められる状態であった。また、擾乱がさらに下層にまで及ぶ箇所も見られた。

第Ⅲ層は、十和田a降下火山灰から地山直上の暗褐色土(第Ⅳ層)までの黒色または暗褐色の土層である。色調や土層の堅さなどから4層(Ⅲa～Ⅲd層)に分層される。Ⅲa層は混入物をほとんど含まない黒色土層で、堅くしまっている。この層の上面からは土師器が出土し、平安時代前半の堅穴住居跡の構築面でもある。本調査区では、この層の厚さは5cmほどで、遺物は出土しなかった。Ⅲb層もⅢa層と同様に混入物をほとんど含まない黒色土層だが、Ⅲa



第3圖 基本層序圖(1)



S. 1/60
 柱状図は 1/600

第4図 基本層序図(2)

層よりやや軟弱で、Ⅲ a 層とは区別される。本調査区におけるこの層の厚さは5 cmと薄く、遺物は出土しなかった。Ⅲ c 層は極暗褐色土層だが、本調査区では確認されていない。Ⅲ d 層は地山粒を少量含んだ黒褐色土層で、遺物包含層である。本調査区から出土した遺物はいずれもこの層から出土している。縄文時代後期初頭の遺構確認面である。

第Ⅳ層は、地山直上の暗褐色の土層で、わずかに粘性があり、しまっている。本調査区では本層まで掘り下げず、Ⅲ d 層面での遺構確認を行なった。

第Ⅴ層は、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する十和田 a 降下火山灰に対比していることから、「下位火山灰」あるいは関東ローム層に相当することから「ローム」と呼ばれているものである。本報告書では、本層を「Ⅴ層」以外に「地山」と表現することもある。これまでの調査で確認された遺構の多くは、この層まで掘り込んで作られているが、調査目的である縄文時代後期の遺構は、構築面であるⅢ d 層で確認されることが多いため、本調査では可能な限り上面での遺構確認に努め、本層まで掘り下げなかった。

調査地は、隣接地である第24次調査区の地形データや、現地形の状況から、南側に向かってなだらかに下っていくことが予想されており、調査の結果もそれを裏付けるものとなった。

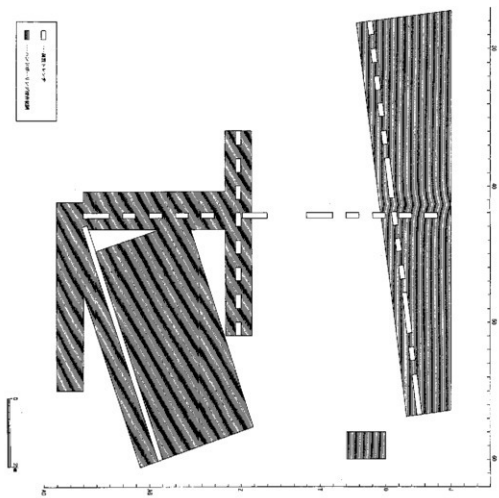
第Ⅱ章 調査の概要

1 調査要項

1. 遺 跡 名 特別史跡大湯環状列石（遺跡番号123）
2. 所 在 地 秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後口
3. 史 跡 指 定 指定年月日 史 跡 昭和26年12月26日
特別史跡 昭和31年7月19日
追加指定年月日 平成2年3月8日
平成6年1月25日
平成13年8月13日
史跡指定面積 249,833.60㎡
4. 発掘調査対象地 史跡南端 H₂区
5. 調査対象面積 17,900㎡
6. 調査面積 発掘調査 560㎡
ハンドボーリング調査 10,910㎡
7. 調査期間 発掘調査 平成20年7月15日～平成20年11月18日
整理・報告書作成 平成20年11月5日～平成21年3月31日
8. 調査主体者 鹿角市教育委員会
9. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課 埋蔵文化財担当
副主幹 藤 井 安 正
(本務 大湯ストーンサークル館 班長)
主 任 三 浦 貴 子
(本務 大湯ストーンサークル館 主任)
10. 調査体制 調査指導 特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会
委員長 小 林 達 雄
副委員長 富 樫 泰 時
委 員 沢 田 正 昭
熊 谷 常 正
大 里 勝 藏



第0図 トレンチ配置図



行政指導 秋田県教育委員会生涯学習課文化財保護室

学芸主事 新海 和 広

作業員 柳館 愛子、関 イサ、田中 栄子、成田由紀子、
三浦 茂雄、大森 勝次、佐藤 一祐、石川 三郎、
黒沢 文子、黒沢 雄雄、黒沢 珠子、湯瀬 トキ、
湯瀬 晴子、成田 則子、柳館 靖子、兎沢寛胞子、
加賀ユキ子、福島美紀子、玉内 佑希、工藤 和枝

11. 鹿角市教育委員会

教育長 吉 成 博 雄

教育部長 中 山 一 男

教育次長 奈 良 實

事務局 生涯学習課

課 長 秋 元 信 夫

政策監 阿 部 安 男

副主幹 藤 井 安 正

主 査 佐 藤 千 絵 子

主 査 海 沼 雄 一

社会教育主事 黒 澤 香 澄

主 任 三 浦 貴 子

12. 協力機関 文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会

2 調査の目的

昭和48年～51年に実施した分布調査により万厓・野中堂環状列石のほかにも遺構や遺物が広く分布することが判明した。

鹿角市・鹿角市教育委員会ではこの成果をもとに昭和53年3月に「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を策定し、昭和59年より広範囲に分布する遺構の形態、性格、構築時期並びに環状列石との関連解明を目的に発掘調査を開始した。昭和59年度～平成元年までは遺跡の性格解明を主目的に、平成2年からは全迹の目的のほかに環境整備に伴う基本資料収集を目的に加え、発掘調査を継続し、本年度が第25次調査となった。

本年度は第IV期環境整備に係わる資料の収集を目的に、史跡南端を調査対象地に選定し、環状列石と直接又は間接的に関連のある遺構の分布状況や旧地形を把握することを目的に実施した。特に、第24次調査で、野中堂配石遺構群と関連のある配石遺構や石列が検出されたことか

ら、この配石遺構が南側隣接地である本調査区まで分布域を広げるかという確認を主な目的とした。

3 調査の方法

グリッドは、第1次調査以降のグリッドを拡張し設定している。N-49° -Wを基準とした5m四方のグリッドとし、グリッドの名称はアルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。

遺跡の保存を考え、遺構の確認・旧地形の把握にはトレンチ調査を基本としている。調査区内に5~10m方眼のグリッドを組み、この杭を使用しながらトレンチを設定した。

遺構の確認確率を高めるため、地形の起伏やこれまで検出された遺構の位置関係などを考慮し、ハンドボーリング探査(40cmメッシュ)を行い遺構の確認確率を高めるようにした。

表土については重機で除去した。II層以下については人力による分層発掘とし、極力上面で遺構を確認するようにした。

実測図作成は、簡易測り方測量により縮尺1/10、1/20で図化した。

遺物の取り上げに際しては、出土地点・出土レベル・層位等を記録した。

写真は、一眼レフカメラとデジタルカメラを使用し、調査の経過や遺構・遺物の確認状況等を記録した。

4 調査経過

大湯環状列石第25次発掘調査は、平成20年7月15日より開始し、トレンチ調査560㎡、ハンドボーリング探査10,910㎡の調査を終了したのは11月18日であった。以下、調査日誌に基づき調査経過の概要を述べる。

7月15日、調査作業員に調査の目的・方法を説明し、事務連絡を行った後、グリッド設定・ハンドボーリング探査を開始する。16日からは重機による抜根・表土除去を行う。

7月22日、23日には第1回特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会が開催され、調査計画について現地でご指導いただいた。

7月24日にはジュニアインターンシップで花輪高校の生徒2人が発掘調査に参加し、作業員とともにハンドボーリング探査を行った。また、8月5日と8月28日には、博物館実習生が発掘調査現場での実習として調査に参加した。

強い日差しの中、1本1本石の有無を確認する地道な作業が続いた。天候が崩れることは少なく、作業は順調に進んだが、雨が少ないことで土が堅くなり、ハンドボーリング探査には仇となった。特に調査区西側では、十和田a降下火山灰がやや厚く堆積していたため、表土から

火山灰までが非常に堅くなり、苦勞した。

ハンドボーリング探査の間には、地形確認のために設定したトレンチの調査を行った。県道付近では遺物が出土するものの、昨年度と同様に遺物の分布がきわめて薄い。特に、調査区の西側では長いトレンチの中に数点の土器破片という状態であった。また、検出される石もこぶし大程度の小さな石が多く、配石遺構を構成するような大きさや種類の石は見られなかった。

10月に入り、基本層序や平面図などの図面作成を行いながら、根気強くハンドボーリング探査を続ける。

10月30日には職場体験として八幡平中学校の生徒2名が作業員とともにハンドボーリング探査を行った。調査員、作業員とともに出土した土器の記録・取り上げ作業も行った。

11月6日・7日には第2回特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会が開催され、報告を行うとともに、現地でご指導をいただいた。

11月18日には現場での全ての作業を終了し、撤収した。

なお、1月8日に行われた大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」において、今回の調査成果を発表した。

第Ⅲ章 環境整備と世界文化遺産

1 環境整備

鹿角市では「史跡の追加指定と民有地の公有化・発掘調査による遺跡の解明・遺構の復元と資料館の建設」を柱とする『特別史跡 大湯環状列石保存管理計画書』を昭和53年に策定し、施設の活用と整備基本指針を示した。

これを具体化していくため、文化庁・秋田県の補助を得て昭和59年度より「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査」を、さらに平成2年度から「大湯環状列石発掘調査」に名称を改め発掘調査を継続した。なお、発掘調査は本年度の第25次調査をもって一旦休止することにしたが、今後はこれまでに蓄積された調査データの整理、関連する周辺遺跡の調査を行ない環状列石の性格解明などを行なっていくことにしている。

平成7年9月には、埋蔵文化財の収蔵と管理を目的に文化庁・秋田県の補助を得て、史跡北側の指定地外隣接地に「鹿角市出土文化財管理センター」を開館し、調査・研究・史跡ガイドの拠点とした。

鹿角市教育委員会では『管理計画書』に掲げた「遺構の復元と資料館の建設（史跡の環境整備）」を具体化していくため、平成元年度に「特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会」を設置し、協議・検討を進め、環境整備に係わる「構想の基本理念・構想の指針・整備の前提条件」を『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』として平成4年にまとめ上げた。

平成7年には『基本構想』を具体的なものにするため「整備のテーマと基本方針・短期計画内容の策定・活用計画」をまとめた『環境整備基本計画』を策定し、さらに平成8年・9年度の2ヵ年を費やして万座・野中堂環状列石を中心とした整備基本方針と復元遺構の抽出と復元方法、ガイダンス施設（現 大湯ストーンサークル館）の目的・機能・活用などの検討を行い、平成10年3月に『環境整備基本計画説明書』を作成し、事業開始の前提条件を整えた。

環境整備事業は平成10年度の文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業」に採択され、第Ⅰ期環境整備事業が開始された。なお、環境整備を進めるにあたって史跡が余りにも広大であることから環境整備は第Ⅰ期～Ⅳ期（各5ヵ年）に分けて実施することにした。

環境整備理念として「史跡の保護と保存・史跡を取り巻く景観の重視」を掲げ、これまでに策定した『基本構想』や『基本計画』の趣旨を厳守した。

なお、第Ⅰ期環境整備並びに第Ⅱ期環境整備に実施した内容は下記のとおりである。

(1) 第Ⅰ期環境整備

①環状列石の復元

露出展示を継続していくため、石が転倒または移動したものについては『大湯町環状列石』報告書に掲載されている実測図、写真と照らし合わせて、国営調査時の状況に復元した。

②掘立柱建物跡の復元

環状列石との関連が強い掘立柱建物跡の復元を行った。万座環状列石隣接部からは51棟の4本・6本柱建物跡が検出されていたことから、この中で環状列石の完成期に同時存在していたものと考えられる建物跡を抽出し12棟を復元対象とした。また、万座環状列石北西側台地縁で検出された5本柱建物跡も史跡の性格・特異性を理解するうえで欠かすことができない遺構であることから復元対象とした。

なお、野中堂環状列石隣接地にも建物跡が存在することが明らかとなっていたが、同列石の北側については埋蔵された状況をそのまま保存する目的のため調査を行わないこととし、建物跡の配置などが不明であったことから同列石での建物跡の復元は行わなかった。

③配石遺構の復元

配石遺構は史跡の特徴を表す遺構であることから復元した。環状列石の露出展示継続のため万座環状列石に極めて近い配石遺構（環状配石遺構・配石列など）については保存処理を行なって露出展示としたが、それ以外の配石遺構については実物と同様の自然石を用い復元した。

④地形の復元

発掘調査の成果をもとに環状列石構築当時の地表面の等高線を作成し、遺構の保存に支障のない範囲で土の流き取り（一部盛り土）を行い、地形を復元した。なお、遺構保存層は50cmとした。

⑤植栽

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析結果や出土炭化堅果類、史跡周辺の自然植生を参考に、ツルもの・低木・中木・高木22種2,396本を植栽した。

また、貼芝は環状列石周辺と北側広場のみとし、その他は野草とした。

植栽・芝の管理が行き届くことによって、万座環状列石内には絶滅危惧種となっている「おきな草」が自生し、管理の行き届いた芝地には「ネジ花」が群生し、見学者の目を楽しませている。現在、二つの草花を対象とした写真撮影会・写真展が大湯ストーンサークル館事業として行なわれている。

⑥石材の保存処理

発見以来、約70年余の歳月が経過し、石は黒ずみ、劣化が見られるようになった。

鹿角市教育委員会では、環境整備の根幹として二つの環状列石について現物展示を継続していくための原因究明と保存方法を探った。

・原因究明

原因を究明することが保存処理の第一歩であることから生物学・科学的な調査・分析を行なった。生物学的な原因究明のため秋田大学教授 井上正鉄氏に調査を依頼し、その原因が「カビ・コケ・藻・地衣類」が付着・繁殖したことを突き止めた。これを放置すると石材に生じている亀裂にカビや草根などが入り込み、冬季の凍結による破損を招く恐れがあり、さらにカビなどには石材を溶かす物質を含むものがあることが判明した。

また、同時に土壌・河川・雨水の分析を行なったが、地域や全国的な数値と比較しても強酸性を示すものではなかった。

・洗浄剤の開発と洗浄方法

洗浄剤の開発に当たっては、環境にやさしく、生分解性が高く、且つ経口毒性が低いことを基準に一般的に市販されている薬品・洗剤も含め、数種類の試液を作成・調整して洗浄試験を実施した。最も洗浄力を示したのはニオン系界面活性剤であり、それを母体に次亜素酸ソーダ等を適量・添加・混合したものである。

洗浄方法については、なるべく科学的な洗浄剤の使用を避けるためレーザー洗浄法やドライアイス洗浄法を検討したが、欠点として対象物を傷める度合いが高く、時間やコストがかかることから水と開発した洗浄剤による方法を採用した。

石材に付着・繁殖した黒ずみは幾層にもなっていること、洗浄剤による遺構や周辺土壌の汚染を軽減するため2段階に分けた。1回目は水洗浄とし、汚水が地下に浸透しないように紙オムツなどを石材回りに敷き詰め、水のみでできるだけ洗い落とすようにした。2回目は1回目と同様に石材に紙オムツを巻き、洗浄剤をしみ込ませた紙を巻布し、ビニールシートで覆い1日～2日間養生した。その後、ブラッシング、汚れや洗剤をよく拭き取り、噴霧器や洗浄機で洗浄剤が完全に消えるまで完全に洗い落とした。

・接着、クラック補修、着色

崩壊・破損した石材の接着・補修については洗浄後実施した。破損したものについては接着面をケトン系溶剤で脱脂してから、エポキシ系接着剤（アラルダイト2011）を塗布、必要に応じてガムテープで固定し、硬化させた。クラック箇所にはエポキシ軽量EAバテ（硬化物比重0.85）を埋め込み、硬化後石材の形状に合わせて成形した。色彩的に違和感が生じた場合はアクリルウレタン塗料で着色した。

・強化、撥水、防カビ処理

石材本体の強化、再度のカビや藻などの付着を防止するため次の薬品を塗布した。強化・撥水剤として珪酸エステル系強化剤とシラン系撥水剤を組み合わせたものを使用した。防カビ・防霉剤として事前の試験結果から環状窒素イオウ化合物とヒドラジン系化合物であるCRHを使用した。

塗布に際しては、強化剤に防カビ剤を適量添加・混合し、効率よく含浸させるため刷毛を使用して数度塗布した。1回目は薬剤が石材の表面に浮く程度に浸透させ、1時間～1時間半ほど乾燥させ、必要に応じて塗布を追加した。

石材保存処理を施し5年を経過した。薬品の効果並びに再度の黒ずみ発生を観察するため、各環状列石から定点観察用の石を選び出し、観察カルテを作成している。

⑦ 利便・管理施設

史跡内に設置した利便・管理施設は史跡の景観を損なわないように必要最小限とした。園路の素材として薄緑色の洗出平板をしたが、平板間に芝を入れ、園路そのものが目立たないように配慮した。

⑧ (仮称) 体験学習館の建設

史跡見学者へのガイダンス、体験学習を中心とした活用拠点、史跡の管理施設の拠点として(仮称)体験学習館(現 大湯ストーンサークル館)を建設した。

完成した大湯ストーンサークル館は史跡との景観を考慮した木造平屋建てとし、延床面積は1,164.43㎡である。館内には展示ホール、縄文工房(体験学習室)、万座ホール(講座・講演)などがあり、館外には縄文広場(イベント会場)や展示広場などが付設されている。

現在、史跡並びに館展示については史跡案内ボランティアが主体となり、方言を交えて史跡の解説を行なっている。また、館事業として体験学習(土器・土製品・ペンダント・縄文クッキー作りなど)や観察会(天体観察会・草花撮影会)のほか、縄文文化や環状列石にこだわった講座・講演「縄文に学ぶ」を行っている。

第2表 環境整備の概要(1)

	年度	整備地区	整備内容	補助事業名 事業費
第Ⅰ期 環境整備	平成 10年度	万座・野中堂環 状列石及びその 周辺	・環境整備工事実施設計 ・地形測量 ・石材保存処理調査 環境調査、洗浄剤の開発と洗浄方法、 防カビ剤開発、修復と接着調査ほか ・環境整備 遺構復元(環状配石遺構、配石列)、地 形復元、植栽、園路ほか ・発掘調査	地方拠点史跡等総合整備 事業 (事業費 180,119 千円)
	11年度	万座・野中堂環 状列石及びその 周辺	・環境整備工事実施設計 ・石材保存処理調査 ・石材修復 ・万座・野中堂環状列石実測図作成 ・環境整備 掘立柱建物復元、配石遺構 復元、建物柱復元、園路、 植栽、排水溝、案内板 ・発掘調査	地方拠点史跡等総合整備 事業 (事業費 180,070 千円)
	12年度	史跡指定地外 (仮称体験学習 館建設)	・(仮称)体験学習館建設工事実施設計 ・(仮称)体験学習館建設 杭打工、本土工、電気設備工、機械 設備工	地方拠点史跡等総合整備 事業 (事業費 171,089 千円)
		万座・野中堂環 状列石及びその 周辺	・環境整備工事実施設計 ・石材保存処理調査 ・環境整備 掘立柱建物たき盛り土、 植栽、排水 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費 30,035 千円)

(2) 第Ⅱ期環境整備

①柱列復元

環状列石と関連が強い柱列の復元を行なった。柱列は三本一列が一単位となるもので2条復元した。

第3表 環境整備の概要(2)

	年度	整備地区	整備内容	補助事業名 事業費
第Ⅰ期 環境整備	13年度	史跡指定地外 (仮称体験学習 館建設)	・(仮称)体験学習館建設工事実施設計 ・(仮称)体験学習館建設 杭打工、本土工、電気設備工、機械 設備工	地方拠点史跡等総合整備 事業 (事業費240,509千円)
		万座・野中堂隈 状列石及びその 周辺	・環境整備工事実施設計 ・環境整備 地形復元、植栽 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費30,063千円)
	14年度	万座・野中堂隈 状列石及びその 周辺	・環境整備工事実施設計 ・石材洗浄並びに保存処理 ・野中堂隈状列石実測図作成 ・環境整備 配石遺構復元、地形復元、 サイン設置、植栽、園路ほか ・発掘調査	地方拠点史跡等総合整備 事業 (事業費200,009千円)
第Ⅱ期 環境整備	15年度	史跡西側地区	・第Ⅱ期環境整備地域の地形測量 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費21,384千円)
	16年度	史跡西側地区	・第Ⅱ期整備実施設計 ・発掘調査 ・『特別史跡大湯環状列石(Ⅰ)』作成・刊 行・・・遺構編	保存修理事業 (事業費25,209千円)
	17年度	史跡西側地区	・環境整備 地形復元、園路、木柵設置、 排水橋設置他 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費30,628千円)
	18年度	史跡西側地区	・環境整備 柱列復元、植栽 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費27,443千円)
	19年度	史跡西側地区	・環境整備 植栽 ・発掘調査	保存修理事業 (事業費24,850千円)

第4表 今後の環境整備計画

	年度	整備地区	整備内容	補助事業名費
第Ⅲ期 環境 整備 案	20年度	史跡東側地区 (一本木後口地区)	・第Ⅲ次環境整備基本計画策定 ・発掘調査	保存修理事業
	21年度	史跡東側地区	・第Ⅲ期整備実施設計	
	22年度	史跡東側地区	・環境整備	
	23年度	史跡東側地区	・環境整備	
	24年度	史跡東側地区	・環境整備	
第Ⅳ期 環境 整備 案	25年度	史跡南側地区	・第Ⅳ次環境整備基本計画策定 ・地形測量	
	26年度	史跡南側地区	・第Ⅳ期整備実施設計	
	27年度	史跡南側地区	・環境整備	
	28年度	史跡南側地区	・環境整備	
	29年度	史跡南側地区	・環境整備	

②地形復元

万座環状列石に近い地域については、発掘調査で得られた情報から縄文当時の等高線を作成し、地形の復元を行なった。遺構構築面や当時の地表面を保護するため50cmの保護層とした。また、整備対象地区の百側については現状のままとし、畑境に生じた凹凸を無くす程度に地均した。

③植栽

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析結果や出土炭化堅果

類、史跡周辺の自然植生を参考に、ツルもの・低木・中木・高木25種1,129本を植栽した。また、一部に芝を貼った。

④利便・管理施設

史跡西側を周回する園路、雨水処理のための浸透枡、転落防止の木柵、見学時の休憩用として木製ベンチを設置した。園路はバーク敷きのものとし史跡の景観を考慮した。

2 世界文化遺産

平成18(2006)年9月、文化庁より「世界文化遺産暫定一覧表記載候補を自治体から公募する」ことが発表された。鹿角市では庁内協議、環境整備検討委員会の指導を受け、11月15日、提案書「国指定特別史跡 大湯環状列石」を秋田県教育委員会に提出した。同じ頃、北秋田市でも史跡伊勢堂岱遺跡を暫定一覧表に記載するため提案書を提出しており、秋田県教育委員会ではこれを取りまとめ、秋田県、鹿角市、北秋田市の共同提案として、提案書「ストーンサークル」を文化庁に提出した。

平成19(2007)年1月、文化庁より「暫定一覧表追加資産候補」が発表されたが、「ストーンサークル」は継続審議となった。継続審議となった提案には青森県の「青森県の縄文遺跡群」があったこと、さらに北海道及び北東北を中心に同一文化圏を構成していることから、4道県の代表的な縄文の遺跡を核として提案書を作成していくため4道県の教育委員会による「縄文遺跡群世界文化遺産登録推進会議」を立ち上げ、提案書の作成を開始する。

鹿角市では、同会議を積極的に支援するとともに、独自で世界文化遺産登録に向けての取り組みを広く周知するため、講演・講座、展示を開始した。

同年12月、4道県知事が提案書「北海道・北東北の縄文遺跡群」を提出。再・新規提案32件の提案書が提出された。

提案書は、文化庁内の文化審議会文化財分科会で審査され、その結果、平成20年9月26日に日本の暫定一覧表に記載すべき資産として選定された。その後、12月15日、外務省で行われた世界遺産条約に関連する省庁連絡会議（外務省・文部省・環境庁など）において、ユネスコの世界遺産委員会への追加資産として了承され、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」と改称し、一覧表が提出された。

なお、暫定一覧表は平成21年1月5日付で登録され、ユネスコのホームページで紹介されている。

第IV章 H₂区の検出遺構と出土遺物

1 検出遺構

H₂区において遺構は確認されなかった。

2 出土遺物

H₂区からは、103点の土器破片が出土した。

土器については、時期ごとに群別し、文様や施文方法で分類した。

①縄文土器

本調査区からは、103点の土器破片が出土した。

後期初頭から前葉の土器

縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器を一括した。

1類：帯縄文が施された土器（第7図1）

地文上に沈線で施文した土器である。1は花卉状文を施したものである。

焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を示す。

2類：沈線文の土器（第7図2～第8図21）

沈線文のみを施した土器を一括した。2～3条の平行沈線により、曲線文や入組文が施されている。18～21は調査区の東側、県道に近いトレンチからまとまって出土した。

焼成はいずれも良好で、色調はにぶい黄橙色を示す。

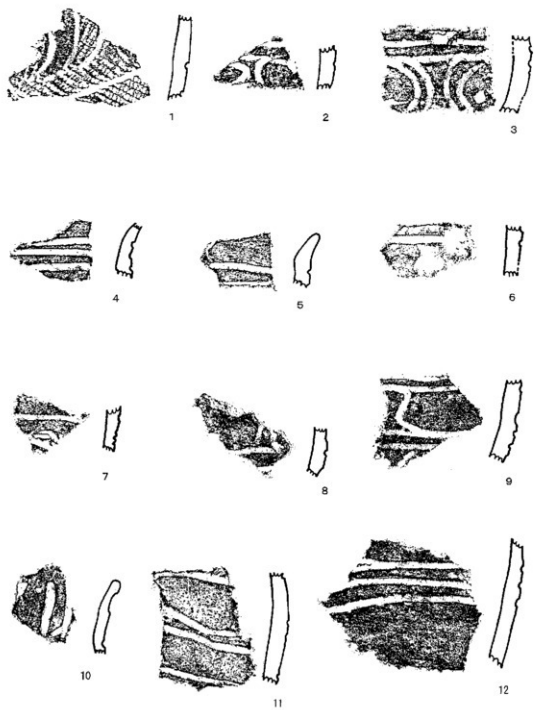
後期の土器

縄文時代後期に位置づけられる土器を一括した。

1類：縄文の土器（第8図22～第9図）

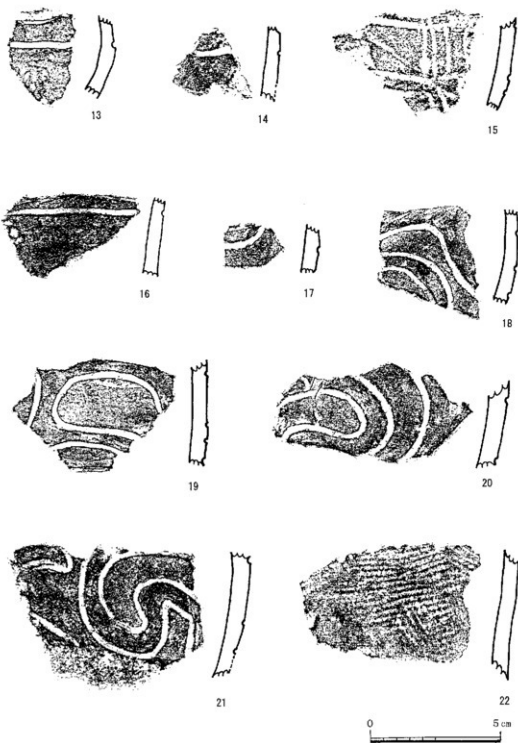
地文のみの土器破片を一括した。深鉢形土器が主体で、単節の縄文は施されている。

焼成はいずれも良好で、色調はにぶい黄橙色を示す。

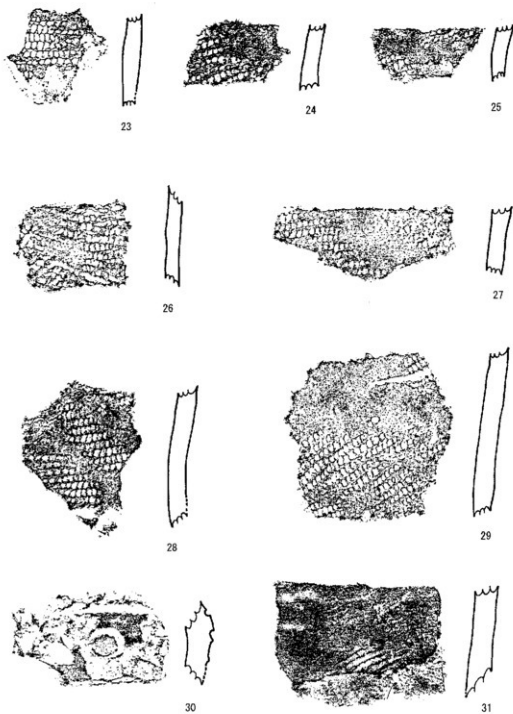


第7图 出土土器(1)





第8圖 出土土器(2)



第9圖 出土土器(3)

第V章 その他の調査

史跡内の発掘調査とともに環状列石の性格解明と環境整備の資料収集のため、平成17年・18年に史跡周辺の地形調査、同19年・20年には動植物調査を実施した。また、平成16年度からは周辺の遺跡詳細分布調査を行なっている。

1 史跡周辺の地形と自然環境

(1) 史跡周辺の地形 (第10図)

史跡ののる台地は、大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食作用によって形成された規模の大きな舌状台地で、全長5.6km、幅0.5～1.0kmを測り、南西方向に延びている。

平成17年・18年に台地斜面の地形調査を行なった。

台地は、北側と南側とも河川の浸食によって形成されたものと考えられるが様相を異にしている様子を観察した。

史跡の北側斜面(大湯川に面した斜面)は、台地上面から大湯川までは比高30mを測り、13ヶ所の平場と5ヶ所の湧水地を確認することができた。平場は概ね三段(上位より平場4→5→6)に区分され、最も大きな平場は斜面中程にある平場5で長さ180m×幅14m～40mを測る。杉の植林以前は畑地として利用されていたようであり畝状の盛り上がり僅かに観察できる地域もある。湧水は万座環状列石の北西側に大きく入り込んだ沢(湧水1・2)の湧水量が多く、以前はポンプを設置して農業用水(撒布用)として使用されていた。

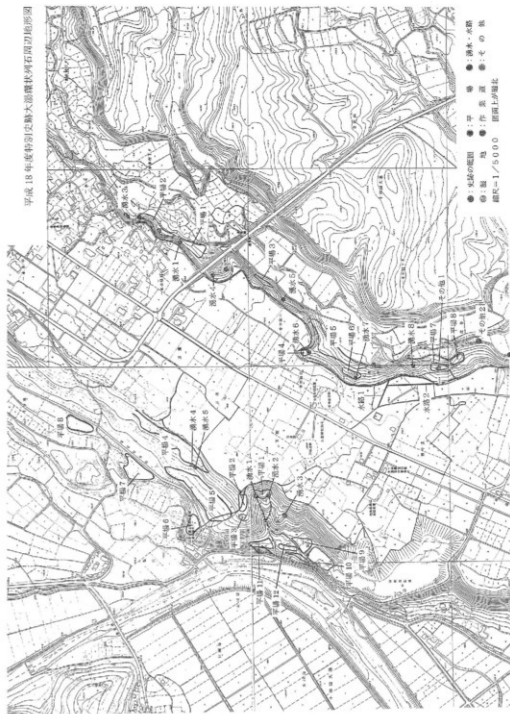
一方、台地南側(豊真木沢川に面した斜面)は、台地上面から豊真木沢川までは比高25mを測る。斜面より8ヶ所の平場と8ヶ所の湧水を確認することができた。平場は斜面下位(平場5)に見られ、北側斜面に見られるものと比較するとその規模は極めて小さい。湧水は北側より多いが湧水量は細い。

(2) 史跡周辺の自然環境 (第11図)

平成19年・20年の2カ年にわたり踏査した。台地斜面及び平場(図面では黄緑色)は畑、杉林として利用されているほか落葉広葉樹林となっている。台地縁(史跡境界部分・図面では緑色)は高木にアケビ、フジ、スイカズラなどのツタ類がマント群生をつくりだし、湧水地(図面では水色)とその周辺にはセリ、ネコメノソウなど湿地を好む植物が群生をつくっている。

史跡内及び周辺にはイヌダテ、オオバコ、ヤブカンゾウ、セイヨウタンポポなどの外来

平成 18 年度特別史跡大湫遺跡河石岡跡地形図



第 10 図 史跡周辺の地形



黄緑色：台地斜面・平部、畑や杉林として一部利用されている。それ以外は落葉広葉樹林となっている。

緑色：台地縁、高木にツタ類がからみマント群生を作り出している。

水色：湧水地または渾水。

朱色：史跡指定範囲

第11図 史跡周辺の自然環境

(備化)植物が多く、縄文の植生を脅かしている。

自然環境が残された周辺はケモノの生息に都合の良い場所となりニホンカモシカ、ニホンザル、タヌキ、ウサギなどが史跡を横切る姿が目撃されている。

また、環状列石を作り上げた人々の生活を支えた動物・魚類なども豊富で、環状列石の構築材である石英閃緑玢岩を運び出した安久谷川は、これまで魚の棲まない河川と言われていたが岩魚や山女魚の姿を見ることができるようになったほか、安久谷川と合流する大湯川には鮎が遡上し、全国的にも有名な釣り場となっている。

2 大湯環状列石関連遺跡の調査（第12図、第10表）

(1) 調査の目的

大湯環状列石を作り上げた人々の堅穴住居跡については、これまでに万座環状列石北側台地縁より5棟、同列石南西側縁より9棟、野中堂環状列石周辺より2棟の計16棟が確認されている。

しかし、このような大規模な記念物（環状列石、配石墓群）をつくり続けていくには長い年月とそれを支えたムラが存在するはずであり、これまでに確認された住居敷では到底支えきれないものと考えられる。

このようなことから環状列石を作り上げた人々のムラを列石より少し離れた場所に求め、平成16年度より遺跡詳細分布調査を行ない、関連遺跡の確認に努めている。

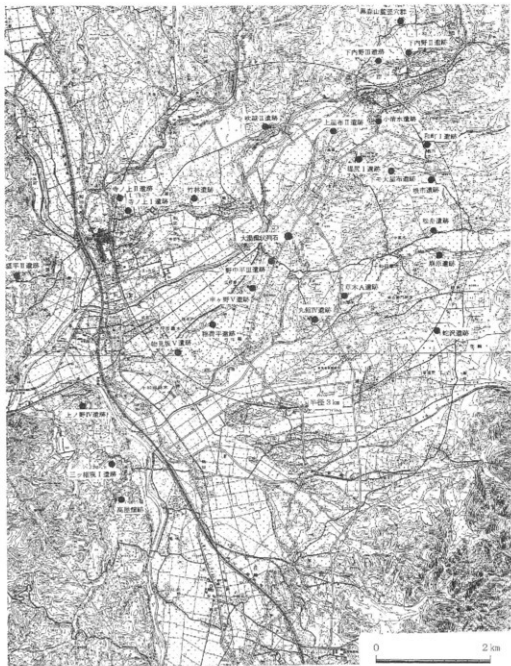
調査にあたり、調査対象とした遺跡は、大湯環状列石の構築材である石英閃緑玢岩を搬出した河川である安久谷川の下流域、米代川を挟んで対峙する高屋環状列石（遺跡名 高屋館跡）との位置関係から、大湯環状列石を中心とした半径3km内外に所在する縄文後期の遺跡を対象とした。なお、対象とした遺跡と調査概要は第5～6表のとおりである。

(2) 成果と今後の調査計画について

これまでの調査で大湯環状列石と関連の強い遺跡は、小清水遺跡と高屋館跡（環状列石）である。

小清水遺跡は、平成元年度に実施した遺跡詳細分布調査の際、畑境に川原石（石英閃緑玢岩がほとんど）が50個程積み重ねられている状況を確認していたこと、大湯環状列石と同じ台地上に立地することから調査対象とした。遺構の分布は台地縁に集中しているものと判断し、トレンチを設定したが平安時代の堅穴住居跡が数多く確認された。このことから調査地を内部に移したところ縄文後期前葉の堅穴住居跡1棟を確認した。

高屋館跡は、平成元年度に農免農道建設に先立ち秋田県教育委員会によって調査された遺



第 12 図 周辺遺跡分布図

第5表 調査概要

調査年度	調査遺跡	調査概要
平成 16年度	松舟遺跡	縄文後期の竪穴住居跡4棟、土坑2基、柱穴状ピット1個のほか後期土器片、石器が出土した。
	蛇沢遺跡	縄文晩期の土器片のほか、弥生土器・土師器片が出土。遺構は確認できなかった。
17年度	草木A遺跡	縄文後期末～晩期前葉の土器片とともに、同時期と判断される石囲炉2基を確認した。このほかに平安の住居跡が確認された。
18年度	丸鱈IV遺跡	縄文晩期・弥生土器片とともに石器が出土した。遺構は確認できなかった。
19年度	小清水遺跡	以前から畑境に川原石が50個程積み重ねられていた遺跡で、台地縁より約50mの地点から縄文後期の竪穴住居跡1棟を確認した。調査は台地縁を中心として進めたことから縄文後期の遺構の検出数が少なかったが、同じ台地上に立地することも含め、大湯環状列石と関連が強い遺跡と判断している。
	上屋布II遺跡	大湯環状列石がのる台地基部に立地する。縄文前期・後期土器片が出土した。遺構は確認できなかった。
20年度	高屋館跡	大湯環状列石の構造に類似する環状列石1基が確認されていた。今回の調査は列石東側の状況の確認で、環状列石の径は約30mを測ること、列石の残存状況が良好であることが判明した。大湯環状列石を解明する上で重要である。
	三ツ権現I遺跡	高屋環状列石とは沢を挟んで北側に位置する遺跡である。後期前葉の土器片が多量に出土した。遺跡内には耕作の際抜き取られた川原石が見受けられたが、配石遺構に用いられたものかは判断できなかった。

第6表 周辺遺跡・関連遺跡発掘調査(案)

調査年度	調査遺跡	調査概要
21年	堤尻Ⅰ遺跡 申ヶ野Ⅴ遺跡 大湯環状列石隣接地	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
22年	下内野Ⅱ遺跡 下内野Ⅲ遺跡 大湯環状列石隣接地	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。下内野Ⅲ遺跡からは配石遺構の構築材と考えられる川原石(石英閃緑紛岩)が発見されている。
23年	稲荷平遺跡 物見坂Ⅴ遺跡 折戸遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。 ・宮野平遺跡は黒又山に所在する遺跡である。黒又山は史跡から最も近い山であり史跡との関連性を探る
24年	野中平Ⅲ遺跡 黒森山麓住居群遺跡 宮野平遺跡(黒又山)	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。黒森山麓住居群遺跡からは中期後半の住居跡が検出されている。 ・宮野平遺跡は黒又山に所在する遺跡である。黒又山は史跡から最も近い山であり史跡との関連性を探る
25年	竹林遺跡 吹越Ⅱ遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
26年	崩原遺跡 根市遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
27年	下モ大屋布遺跡 和町Ⅰ遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
28年	上ノ野Ⅳ遺跡 狐平遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
29年	寺ノ上Ⅰ遺跡 寺ノ上Ⅱ遺跡	・大湯環状列石と関連のある集落等が予想される遺跡・区域であり、これらの有無を確認する。
30年	小清水遺跡 高屋館跡	・小清水遺跡からは後期前葉の聖穴住居跡が発見されており、その分布範囲を確認する。また、高屋館跡においては環状列石の全容を表出させ、大湯環状列石との比較検討をする。

跡で、環状列石の東側一部が未調査のまま残されていた。大湯環状列石との比較検討を行なう上で貴重な遺跡であることから、環状列石の残存状況並びに規模の確認のため調査を実施した。

県教委が発掘調査を実施してから約20年の歳月が経っているため、植林された杉も大きくなりその保存状況が心配されたが、心配するほどのものではなかった。環状列石は南北33m×30m規模のものであることが判明した。

第12図に、これまでに発掘調査を実施した遺跡と今後調査を予定している遺跡の位置を示した。注目される遺跡は大湯川を挟んで大湯環状列石と対峙する下内野Ⅱ遺跡・同Ⅲ遺跡である。この遺跡からは後期前葉の土器片が出土しているほか、配石遺構の構築材である石英閃緑玢岩が野積みされており、その成果が期待される遺跡である。

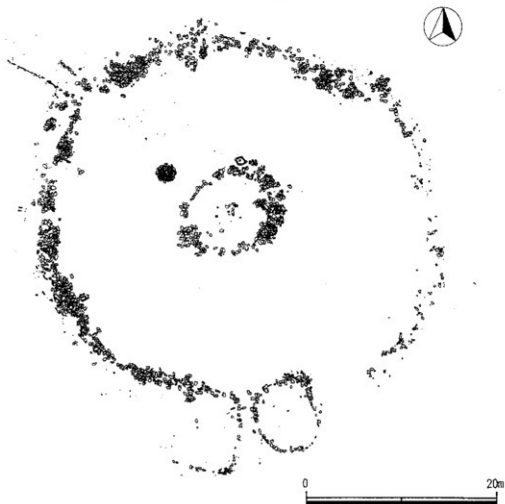
第VI章 分析と考察

1 北東北地方・北海道の大規模環状列石

縄文時代後期を迎えると、それ以前に発達した大規模集落が解体し、数棟で営まれる集落へと移り変わることが知られている。

この時期と並行して北東北・北海道に環状列石（記念物）が出現する。

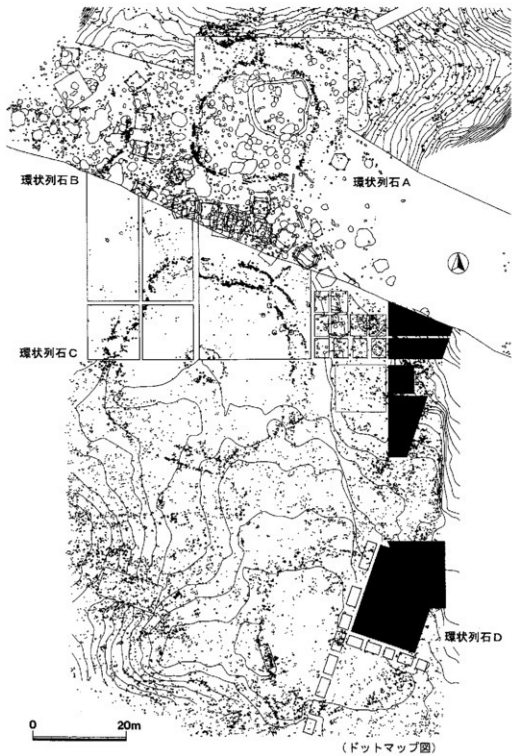
ここでは、大規模な環状列石を対象（径30m以上のもの）とし、その概要（立地、時期、規模、構造、性格）をまとめ、本文後半に実測図、写真を添付した。



第13図 野中堂環状列石



第 14 圖 万座環状列石



第 15 図 伊勢堂位遺跡実測図

i 立地

環状列石は、見晴らしの良い舌状台地または段丘上につくられる。列石を取り囲む景観を考慮しており、それぞれ位置決定ともなる指標となる対象を有している。

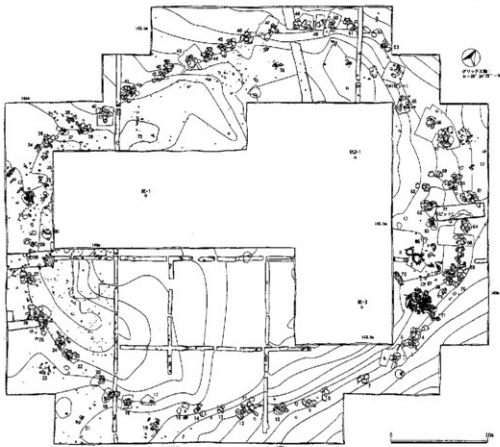
立地条件として3つのパターンに分類される。立地が内陸部のもは秀峰な山（山並みや太陽の日没・日の出）を、海岸線のもは海を指標とするものが多い。

例1：遺跡を遠巻きに四方の山脈や山地で取り囲まれるもの。

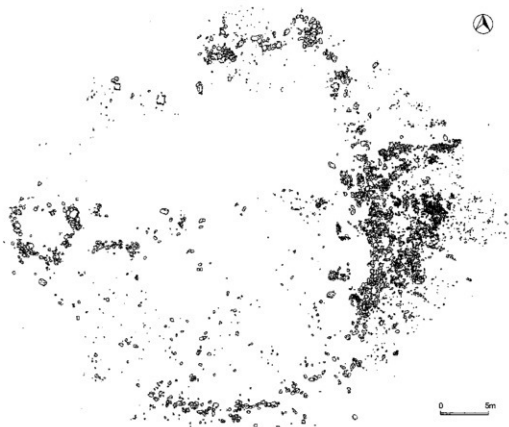
大湯環状列石は視界を遮るものではなく東側に奥羽山脈、西側に高森山地を眺望することができる。大湯環状列石は「四方を囲む山並みと夏至の日没方向」が、伊勢堂岱遺跡は白神山地、大森勝山遺跡は岩木山を指標としているものと考えられる。

例2：谷間の段丘につくられ、その開口部の延長線上に秀峰な山を望むことができるもの。

大森勝山遺跡は八甲田の西側山麓の谷間に立地し、谷間開口部の延長線上にある岩木山を指標としている。湯舟沢環状列石は谷頭の延長線上にある谷地山を指標とし



第16図 大森勝山遺跡



第17図 太師森遺跡

ているものと考えられる。

例3：段丘・台地先端につくられ、海岸線を望むことができるもの。

鷺ノ木遺跡は噴火湾又は北海道駒ヶ岳を、忍路環状列石は日本海を一つの指標とするとともに、構築材の採取地を望む場所につくられたものと考えられる。

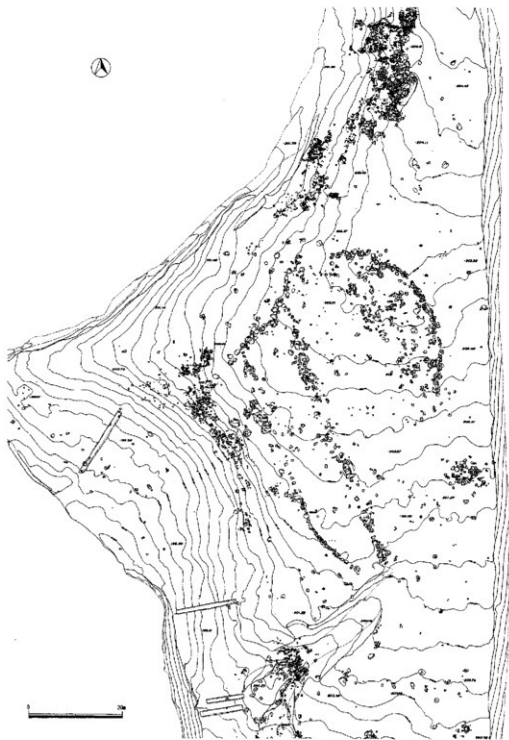
ii 時期

縄文後期前葉から中葉にかけて構築される。それ以前に環状列石の萌芽ともいべきものが縄文中期後半に出現し、鹿角市・天戸森遺跡や岩手県一戸町・御所野遺跡がこれにあたる。

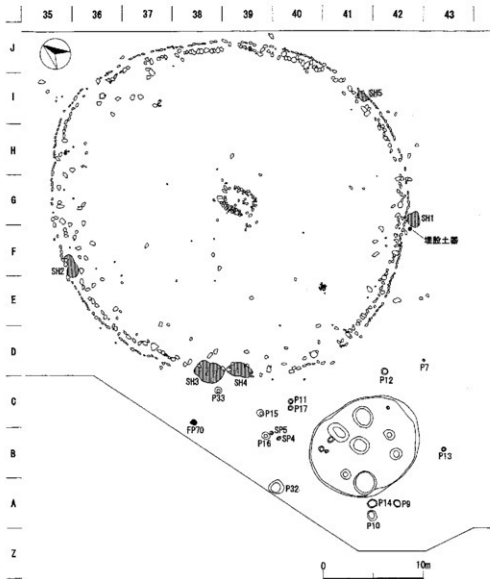
なお、青森県八戸市荒谷遺跡で確認された環状列石は、共伴する遺物から縄文時代晩期～弥生時代前期のものと考えられている。

iii 規模

事例のなかで最も規模が小さいものは伊勢堂岱遺跡・環状列石Aの径30m、最も大きいも



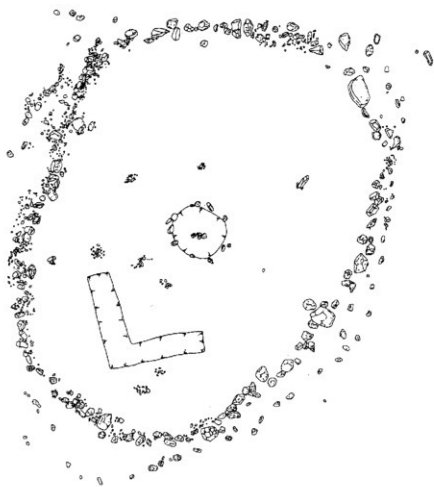
第18圖 湯舟沢環状列石



第19図 鷺ノ木遺跡

のは大湯環状列石・万座環状列石の径52.25mである。径35m・45m・50m前後の数値に集中する。

注 大湯環状列石の主体をなす野中堂環状列石、万座環状列石の規模については、これまで前者の径を42m、後者の径を48mとしていたが、平成15年度に再計測したところ各々の最大径は野中堂が44m、万座が52.25mであった。



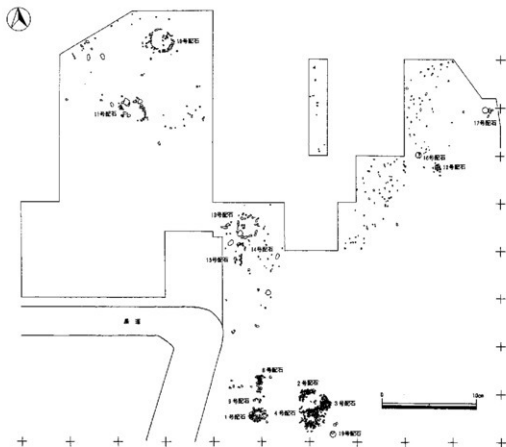
第 20 图 忍路環状列石

IV 構造

初めて配石遺構に注目したのは渡瀬荘三郎氏である。渡瀬氏は明治19(1887)年の人類学会報第2号で北海道小樽市に所在する三笠山(忍路)遺跡の配石遺構を「環状石籬」の名称をもって紹介した。この名称は、欧州において発見されるストーンサークルに類似することから、これを直訳したものであった。

大正8年、長谷部言人氏は岩手県大船渡市に所在する上の山貝塚を調査した際、埋葬人骨に隣接して、長径1.1m程の楕円形に、二重深状に配列された大小10個の川原石でつくられた石群を発見し、これを人類学雑誌第34巻2号(1919年刊)に「環状列石」という名称で紹介した。これは、三笠山遺跡の例とは形態的・規模的な違いが見られることから用いられたものと考えられるが、概念的な差は明らかとなっていない。

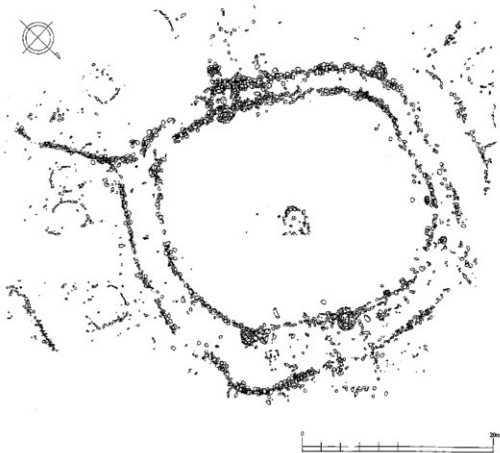
発見史・研究史から考えると、大きな石を用い大規模なものを環状石籬、小さい石を用い



第21図 天戸森遺跡配石遺構群



第22図 御所野遺跡



第23図 小牧野遺跡

小規模なものを環状列石と呼ぶべきものと考えられる。その後、その使い分けは行なわれず、環状列石という名称に統合され、現在、この用語が使用されている状況である。本報告書で紹介した環状列石は発見史からみると環状石籬として紹介されるべきなのであろうか。

北東北・北海道で確認されている大規模な環状列石についてはその構造から「大湯型」・「小牧野型」・「忍路型」に分類されている。

「大湯型」：大湯環状列石を基本形とする。配石（組石）遺構の集合体で、その配置は円環状を呈する。天戸森遺跡、太師森遺跡や大森勝山遺跡がこれにあたる。

天戸森遺跡は、台地の北側斜面に8基の配石遺構が地形に合わせ弧状に配置されている。

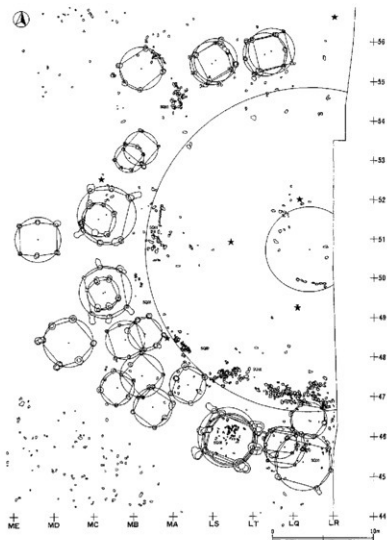
「小牧野型」：小牧野環状列石を基本形とする。細長い川原石を縦横に並べる配置が特徴的である。伊勢堂岱環状列石にこの特徴的な配置が随所に見られる。

「忍路型」：忍路環状列石を基本形とする。大きな縦長の川原石を立て、大規模な円環

状を描くように配置されるもので、二重環状を呈するものもある。使用される石の大きさに相違を持つが鷲ノ木環状列石がこれにあたるものと考えられる。

V 性格

初めて配石遺構に注目した渡瀬氏は、三笠山（忍路）遺跡の報告の中で「思うに古来人類が石類を以て墓標に用いし事は甚だ明なる」として墓標的な性格を持つものであるという見解を示すとともに「墓標にあらざれば礼拝場たりしなるべし」として祭祀場の可能性もあることを示した。



第 24 図 高屋館跡（環状列石）実測図

その後、長谷部氏は上ノ山貝塚の報告で、性格については「本列石も墓の一部かは知らぬが、列石だけでは墓とはいえず」とし、墳墓・祭祀のいずれかであろうとしながらも「本例が何を意味するのかが疑問とされる」と結論付けをしなかった。

配石遺構や環状列石の本格的な調査は、第二次世界大戦後に開始されたといっても過言ではない。

同じ頃、北海道の類似事例について精力的に調査を行っていた河野広道氏は、朱里朱円遺跡を調査し、配石下に土坑が存在すること、さらにその内部から人骨とともに副葬品が出土したことから北海道の配石遺構は縄文時代に構築されたもので、埋葬施設としての性格を持つものであることを指摘した。

しかし、それは北海道の事例に対しての性格付けであり、東北地方や関東地方で発見された類似遺構全体の性格を示すものではなかった。

文化財保護法の制定・施行とともに文化財保護委員会（現 文化庁）が直接、遺跡の発掘調査を実施することができるようになり、その性格解明のために実施された調査が昭和26年・27年の「大湯町環状列石」の発掘調査（国営調査）といわれている。

この調査を総括した斎藤忠氏は「この遺構を構成する組石が我々の認識した範囲内において、その下底に壤を有していることが普通であることの認められることは、これを墓塚と見、組石を墓標的なものと考えられることに蓋然性もある」として墳墓の可能性が極めて高いものであるとした。しかし、大湯磐雄氏は数例であるが壤を持たないものがあること、燐分析で良好な結果が得られなかったことから、長野県上原遺跡の例をあげ「石をもって囲み、または敷き詰めた場合は、神霊の宿る聖なところ（餐庭）」であるとし、古代の石信仰、さらに配石遺構がつけられる場所からは富士山型の峰を望めることから「原始山岳信仰」を引用して、祭祀遺跡であると主張した。

このような状況から、配石遺構並びに環状列石については「墳墓説」と「祭祀場説」の二説が並列するように結論付けられないままに高度開発時期まで続いてきた。

では、これまでに発見された環状列石の性格についてはどのように性格が考えられているのだろうか。大湯環状列石のように環状列石そのものは配石墓の集合体で、それに伴い祭祀的な要素・施設が付随したもの、鷲ノ木遺跡のように環状列石を聖域としてつくりあげ、それに隣接して墓域が付随するものなどがみえ、性格については一つに絞る込むこと事態が不可能に近い。

vi 大湯環状列石について

大湯環状列石は、大湯川の左岸に形成された標高180m前後の舌状台地に位置する。

昭和6年、耕地整理時に発見され、昭和31年7月に特別史跡に指定された。

大湯環状列石と言う名称は、全体を示す総称として使用され、各々は野中堂環状列石、万座環状列石と呼ばれている。

史跡は、この二つの環状列石を主体とする縄文後期前葉～中葉の遺跡で、その面積は約25万㎡である。個々の環状列石の規模は野中堂環状列石の最大径は44.00m、万座環状列石の最大径は52.25mを測る。

環状列石は、数個から十数個の川原石を円形・楕円形・菱形などの組み合わせた「配石（組石）遺構」の集合体である。各々は約100基以上の配石遺構が二重の円環状に配置され、野中堂環状列石では55基、万座環状列石では105基の配石遺構が原型を保っている。特に形の整った「日時計状組石」はそれぞれの列石中心からみて北東方向に配置され、列石外帯からは昆虫の触覚状に延びた二本一対の石列（出入口施設）が付随している。

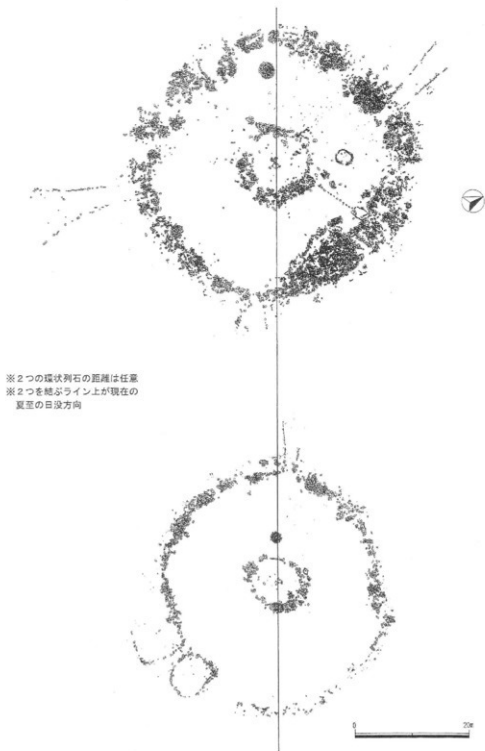
環状列石隣接地の調査では、各々の列石を核に独立柱建物、土坑・貯蔵穴、遺物廃棄域が同心円状に分布することが判明している。この遺構の同心円状分布は後に伊勢堂岱遺跡・環状列石C発見の契機となった。

また、環状列石周辺の遺構分布状況も明らかにされ、野中堂環状列石の南側出入口の延長線上には配石群（野中堂配石遺構群）や石列が、同列石の東側約150mの地域には二重の弧状に配置された配石遺構群（一本木後口配石遺構群、遺構群の一部については昭和48年～51年の分布調査で確認済）が分布することが確認されている。

その後、万座環状列石周辺も調査が進み、列石に直接関連する同心円状の遺構分布と重複して列石北側では環状配石遺構群が、万座北側台地縁からは4棟からなる堅穴住居群、万座と北側台地縁の間には土坑を伴う円環状に配置された掘立柱建物群が確認された。また、同列石の西側の調査によって新たに9棟からなる堅穴住居群、等間隔に並んだ2条の柱列、同列石南側出入口の延長線上からは6基からなる配石遺構群（万座配石遺構群）が確認されている。二つの環状列石を中心にそれと直接または間接的に結びつく遺構分布域は広範囲で、しかも場の使い方は計画性を持ったものであった。

さて、二つの環状列石の配置（第25図）については、以前より川口重一氏によって注目されていたが、地元研究家の観察によって、僅かにズレが生じているものの「夏至の日没方向（冬至の日の出方向）」を指すものであり、列石の位置決定には立地する景観と太陽の運行が影響していることが判明した。

列石に使用されている石（人頭大以上）は野中堂で約2,000個、万座が約5,200個で、石英



第 25 図 万座・野中堂環状列石

閃緑玢岩と呼ばれるものが全体の約95%を占めている。石英閃緑玢岩は列石から北東約6kmの諸助山に柱状節理として露頭しており、この岩体から安久谷川に崩落し、水磨された柱状のものが数多く使用されている。その採取地は安久谷川下流域から大湯川の合流域と考えられている。

環状列石の性格については、昭和26年・27年に文化財保護委員会が発掘調査を実施し、墳墓説と祭祀場説の二説が提示されていた。その後、鹿角市教育委員会が実施した一本木後口地区の配石遺構群の調査から、配石遺構については「配石墓」、その集合体である環状列石は「環状に配置された集団墓」と考えられるに至った。

環状列石の構造については、これまで水野正好氏、阿部義平氏、林謙作氏の研究論文がある。水野氏は「列石外帯は数基から十数基の配石で構成される12の小塊があり、小塊二つで大群を構成する」とした。水野氏の考えを借りてその構造を考えていくと、列石を構成する個々の配石遺構は個人の「配石墓」と考えて推論していくと、小塊は個人の次の大きな集団である「家（家族）」として、列石に付随した出入口施設を「家」の次に大きな集団となる単位を区画するものと仮定すれば「ムラ」という単位に辿り着く。このような考え方が許されるとすれば万座環状列石は四つのムラ、野中堂環状列石は少なくとも二つ以上のムラによって、長年にわたり作り続けられた墓域・記念物と考えていくことができる。

では、環状列石を構築した人々のムラはどこに所在するのであろうか。これまでの調査で万座の北側台地縁（5棟）・同北西側台地縁（9棟）、野中堂の東西の外帯に隣接して2棟の計16棟が確認されている。これらは出土遺物や確認層序などから環状列石とほぼ同時期である後期前葉がほとんどであるが、万座北西側台地縁、野中堂に隣接するものなかに後期中葉のものが1棟ずつ含まれている。残念ながら住居跡同士の重複を示すものは北側台地縁の一例のみで、一時期に何棟の住居跡が存在したのか不明である。規模は径3～5m程で、中央に石囲炉をもつものが一般的で、数例ではあるが壁際に川原石を使った特殊な組石がつけられるものがある。確認された住居跡は環状列石をつくりあげた人々の住居（ムラ）として考えてよいが、この大規模な環状列石（記念物）をつくりあげるためとしては住居数が少なすぎるものと考えられる。このことから、これまでの調査で確認された住居については環状列石で行なわれたマツリと祈りを司り、記念物の管理を担当し受け継いだ人々（この人々も列石内に埋葬されたものと考えられる）のムラとして考えて、記念物の構築に携わった（あるいは埋葬された）人々のムラは、この記念物から少し離れた場所に所在するものと考えている。

列石に接して掘立柱建物が分布する。万座環状列石では65棟が確認され、平面形（柱配置）は方形、六角形を呈するものが多い。建物は列石外帯と同様に、重複や遺構間の隙間か

ら数棟からなるグループに分割され、水野氏が分割した列石外帯の配石群（小塊）に対応していく。さらに建物の長軸方向は列石の中心を意識した配置を示しながら、六角形のは列石寄りに、方形のものは列石より離れた位置に構築されている。確認当初は列石との強い繋がりを示していることから「殯り屋」的な性格を与えたが、孤立柱建物回りから自然界や非日常生活を意識した遺物が多いことから葬送儀礼（儀式）を含めた畏敬の念を表すための施設として考えている。

これらの遺構とともに多量の土器（完形・復元土器1,000点以上）、石器、土・石製品、炭化物が出土している。

土器は後期前葉～中葉、十腰内Ⅰ式・Ⅱ式土器がみられ、十腰内Ⅰ式土器が主体となる。器形は深鉢・鉢・浅鉢・壺が主体となるが特異なものとして台付土器、片口土器、有孔土器などが含まれている。特異な器形のものには赤色顔料（ベンガラ）を塗布したものがあり「ケとハレ」への明確な意識があったことを示唆させる。

土・石製品は多種多様である。これらは日常使用されたと思えないもので土偶、土版、鐙形土製品、キノコ・動物形土製品、石刀、石冠、石棒、男根性石製品などがあり、環状列石の周りで行われた「マツリや祈り」の様子を垣間見ることができる。（藤井安正）

大湯環状列石

遺跡名	大湯環状列石		
所在地	鹿角市十和田大湯字万座・字野中堂・字一本木後口		
調査主体	文化財保護委員会 秋田県教育委員会 鹿角市教育委員会	調査年度	昭和26年・27年 昭和48年～51年 昭和59年～平成20年
収録報告書	『特別史跡 大湯環状列石(1)』 鹿角市教委2005年3月 『大湯町環状列石』 文化財保護委員会 1953年 ※大湯環状列石に関する文献については本報告書文献目録を参照		
調査原因	学術調査		
調査概要	立地	大湯川左岸、標高180m前後の通称「中通台地」と呼ばれる舌状台地のほぼ中心部に立地する。台地は平埜で、東に奥羽山脈、西に高森山地を望むことができる。	
	検出遺構	環状列石2基(万座105基・野中堂55基)、環状配石遺構13基、方形配石遺構4基、配石遺構92基、集石遺構13基、配石列16条、立石遺構12基、掘立柱建物跡100棟、壑穴住居跡16棟、土坑481基、フラスコ状土坑298基 他	
	構築時期	縄文後期前葉～後期中葉	
	配石の状況	環状列石を構成する配石遺構は8種18亜式(後藤守一氏分類)されている。 環状列石は配石遺構の集合体で、二重の円環を描く。中央から北西方向に「日時計状組石遺構」が配置されている。列石外帯は配石の密集度合や隙間から数基から10数基からなるグループで、12グループを看守できる。各グループは内帯の配石と対応する。さらに、列石を取り囲む建物跡も数基からなる12グループを構成し、最も近い外帯配石グループと対応する。	
	遺構の配置	各々の環状列石を核に掘立柱建物群、土坑・貯蔵穴群、遺物廃棄域が同心円状に分布する。また、万座環状列石北側に環状配石遺構群、同北側50m地域からは環状に配置された掘立柱建物群が確認されている 壑穴住居跡は、万座北側台地縁に5棟、同北西側台地縁に9棟、野中堂に隣接して2棟が分布する。 野中堂環状列石東側200m地点には二重の弧状を呈する配石遺構群が確認されている。	
	遺物	土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式を中心に、後期中葉の十腰内Ⅱ式・Ⅲ式、南境式・宝ヶ峰式土器がある。深鉢・鉢・壺・片口土器・注口土器・切斯土器などがある。 土製品(土偶・鐔形・キノコ形・足形付土版など)、石製品(岩偶・石刀など)多種多様である。	
	性格	配石遺構については「配石墓」、環状列石は「集団墓」と考えられる。列石に隣接する建物跡については「祭祀施設」と考えられている。	
その他	昭和6年に発見され、多くの研究者によって調査研究されている。 昭和17年、古代文化研究所が発掘調査を実施し、環状列石のほぼ全容が現わされている。		

高屋環状列石

遺跡名	高屋館跡		
所在地	秋田県鹿角市花輪字館ヶ沢45		
調査主体	秋田県教育委員会 鹿角市教育委員会	調査年度	昭和63年・平成元年 平成20年
収録報告書	「西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI 高屋館跡」 秋田県教委 1990年 「秋田県鹿角市 遺跡詳細分布調査報告書」鹿角市教委 2009年		
調査原因	農免農道整備事業・遺跡詳細分布調査		
調査概要	立地	鹿角盆地内を北流する米代川とこの支流である花軒田川によってつくられた標高160m程の舌状台地先端部に立地。大湯環状列石が北東方向約3kmに所在する。	
	検出 遺構	環状列石1基（配石遺構9基から構成される） 立石遺構6基、掘立柱建物跡26棟、柱状ピット135個、堅穴遺構3基、土坑126基、フラスコ状土坑5基、埋設土器3基、石囲炉2基、焼土22基、Tピット13基 縄文のみ	
	構築 時期	縄文時代後期前期	
	列石の 形態	外帯と内帯の二重環状となり、外帯径32m～33m、内帯径約8.5mを測る。 配石遺構は後世の擾乱を受けており形態がはっきりとしないが、一つのまとまりを示すもの、弧状を呈するものがある。 配石下や隣接部に土坑や柱穴状ピットを持つものがある。	
	遺構の 配置	直径32m～33mの環状に復元される配石遺構群、その外側に配列される掘立柱建物跡群、墓域全域に分布する土坑群、散在する立石遺構群によって構成される。 掘立柱建物の長軸方向は環状列石の中心とする求心線と直行し、同一地点で数回立て替えられた例や、二重の配列を示す部分がある。	
	遺物	土器は深鉢、鉢、甕が主体となる。沈線文と帯縄文が多く、地文上に平行沈線文を施文するものは少ない。深鉢の文様帯は胴部2/3まで及ぶが胴部中ほどでとまる。粗製のものは口縁部に文様帯が限定され「入組文」が施文される。甕の文様帯は最狭部から下半まで及び縦の入組文を区画文とする。 土製品には土偶、縄形土製品、装身具、円盤状土製品があり、土偶は板状のものである。石製品には円盤状石製品があり、有孔したものや沈線を施したものがみられる。	
	性格	「墓域に隣接し、墓域と密接な対応関係を有する施設であることから、モガリ、蓋送りの場」と考えられている。	
その他	平成20年、鹿角市教育委員会が分布調査を実施し、東側の一部を確認している。杉林となっており保存状況が危惧される。		

天戸森遺跡

遺跡名	天戸森遺跡		
所在地	秋田県鹿角市花輪字陳場142		
調査主体	鹿角市教育委員会 秋田県教育委員会	調査年度	昭和57年
収録報告書	「天戸森遺跡発掘調査報告書」 鹿角市教委 1984年 「天戸森の土器 天戸森遺跡出土縄文土器図録」 鹿角市教委 1990年 「県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 天戸森遺跡」 秋田県教委 1994年		
調査原因	学校建築に伴う事前調査、県道付替えに伴う調査		
調査概要	立地	盆地を北流する米代川右岸、同河川の支流である福十川によってつくられた標高170m程の舌状台地先端部に位置する。配石遺構は北側斜面（B群）並びに縁（A群）につくられている。	
	検出遺構	竪穴住居跡140棟（縄文中期中葉～末葉）、配石遺構21基、埴輪土器2基、土坑103基（フラスコ状土坑65基、土坑35基、Tビット3基）、厩外炉7基	
	構築時期	縄文中期中葉～末葉 （配石下土坑より円筒上層e式・大木8a式～中の平皿式土器の土器が出土）	
	列石の形態	A群は径1～2mの範囲に川原石を積み上げた状況を示す。 B群には細長の川原石の長軸を連結させ、径2m程の円形に巡らしたものが含まれる。 A群・B群のほか、台地平坦部につくられる配石遺構もあり、直線的な配置をていしている。	
	遺構の配置	配石遺構は、台地北側の縁から緩やかに傾斜する斜面に位置する。 縁（A）と斜面（B）の2群に分けられ、A群は6基の配石が集合するように、B群は弧状を描くように配置されている。	
	遺物	配石遺構内出土土器は、深鉢と広口壺が主体となる。深鉢には沈線による胸骨文を施文するもの（円筒上層e式）が多く見受けられる。また、広口壺は口縁部が無文化され、胴部に逆「U字」状の沈線を連続して施文するもの（中の平皿式）がある。	
	性格	配石下に土坑を持つものについては「配石墓」と考えられる。 B群には環状列石の萌芽が見受けられる。	
その他			

伊勢堂岱遺跡

遺跡名	伊勢堂岱遺跡		
所在地	秋田県北秋田市脇神宇伊勢堂岱5-1 ほか		
調査主体	秋田県教育委員会 北秋田市(旧 鷹巣町)教委	調査年度	平成7年・8年(県教委) 平成9年～(市教委)
収録報告書	『伊勢堂岱遺跡』 秋田県教委 1999年 『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(1)～(4)』 鷹巣町教委 1998～2001年 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅵ』 鷹巣町教委・北秋田市教委 2002～2008年		
調査原因	秋田北空港へのバイパス工事に伴う発掘調査。平成9年以降は学術調査		
調査概要	立地	米代川の左岸、標高40m程の舌状台地先端に位置する。遺跡北側に白神山を眺望することができる。	
	検出遺構	環状列石4基(A～D)、配石遺構、掘立柱建物跡、土坑(墓)、プラスチック土坑、竪穴住居跡	
	構築時期	縄文後期前葉	
	列石の状況	<p>列石A：径30mを測り、真北に「メロンの臺」状に張り出した石列を持つ。東側にも弧状の列石があり、二重の円環を呈する可能性を持つ。石の組み方には「小牧野型」が一部に見られる。列石は途切れながら一周する。配石下から土坑が検出されているが対応関係は不明。</p> <p>列石B：弧状を呈し、長さ15mを測る。本来は円環を呈していたものと考えられる。</p> <p>列石C：規模が最も大きく径45mを測る。三重の円環を描く。外側の環は「細長い楕円形」を呈した配石群が「鎖状」に配置されたものと看取され、10程のグループに分割されるものと思われる。</p> <p>列石D：径約33mを測る。二重の円環で構成される。</p>	
	遺構の配置	<p>列石A：列石の途切れと対応するように掘立柱建物跡が対応するものと考えられる。</p> <p>列石B：列石内部に土坑、列石外側に接して掘立柱建物跡が一巡するものと考えられ、細長い楕円形を呈した配石群と対応するものと考えられる。</p> <p>列石C：列石外側に接して掘立柱建物跡が一巡する。建物跡の密集度は非常にたかい。</p> <p>列石D：列石内部に配石遺構、列石に接して掘立柱建物が一巡するものと考えられる。</p>	
	遺物	<p>十層内Ⅰ式直前型式～十層内Ⅰ式の土器が主体を占める。深鉢は波状口縁や平口縁を呈し、横位方向への曲線文や入組文がみられる。文様帯は胴部上半のものが多い。</p> <p>沈線文の深鉢、壺、鉢も見受けられ、「S字状」の縦位連結文を区画文とするものもある。</p>	
	性格		
	その他	環状列石構築に際しては、列石内部の削平作業が行なわれている。 平成20年度の調査において、道状遺構が検出されている。	

太師森遺跡

遺跡名	太師森遺跡		
所在地	青森県平川市新屋達手沢		
調査主体	平川市(旧 平賀町)教委	調査年度	昭和58年、平成12～17年
収録報告書	『太師森遺跡発掘調査報告書』 2005年3月 平賀町教委 『太師森遺跡発掘調査報告書』 2005年11月 平賀町教委 『太師森遺跡発掘調査報告書』 2007年 平川市教委		
調査原因	電力送電線用鉄塔建設に伴う発掘調査、学術調査		
調査概要	立地	浅瀬石川流域、八甲田山系から津軽平野に向かって延びる標高約260mの舌状台地に立地、谷間をととして西側に岩木山を望むことができる。	
	検出遺構	環状列石1基、組石遺構58基、組石石棺墓7基、半円状特殊組石遺構2基、土坑22基、竪穴住居跡4棟、土器棺墓2基 ほか	
	構築時期	縄文後期初頭～前葉(釜沢～十腰内I式期)	
	列石の状況	環状列石は組石遺構や組石石棺墓によって構成される。平面形は楕円形を呈し長軸約45mを測る。列石の東側に組石遺構が集中し「張り出し状」を、西側には数基から構成される小環状がみられる。 配石には「日時計状」のものもみられ、配石下部に土坑を有するものもある。 列石中央から土器棺墓2基が検出されている。	
	遺構の配置	台地先端から基部に向かい、環状列石・住居跡群・組石石棺墓群が配置される。 組石石棺墓群は環状列石から東側約60m地域に、住居跡群(第1～3号住居跡)は列石と石棺墓群のほぼ中間から検出されている。	
	遺物	後期初頭～前葉のものが大半を占める。土器は深鉢が主体となり、沈線文と帯縄文がみられる。沈線文土器は平口縁・波状口縁を呈し、文様帯は胴部中段まで達し、横方向へ伸びる曲線文・弧線文・三角形文が見られる。帯縄文のものは平口縁・波状口縁を呈し、文様帯は胴部最頸部より下方まで達する。横方向の曲線文を主体とする。 十腰内II式またはその直前の土器も含まれている。 土器のほかに、三角形岩版、三角形土版などが出土している。	
	性格	環状列石・組石石棺墓・土器棺墓は関連性を有し、当時の葬制を看取できる。	
その他			

大森勝山遺跡

遺跡名	大森勝山遺跡		
所在地	青森市弘前市大字大森字勝山495番地ほか		
調査主体	岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会 弘前市教育委員会	調査年度	昭和34年～36年 平成18年～20年
収録報告書	「大森勝山遺跡」『岩木山』に収録 岩木山刊行会1968年		
調査原因	学術調査（国史跡指定に伴う確認調査）		
調査概要	立地	岩手山の北東山麓、北側を大森川、南側を大石川に挟まれた標高140m程の舌状台地に立地。	
	検出遺構	環状列石1基（77基の配石遺構の集合体）、竪穴住居跡1棟（長径約13.7mのほぼ円形を呈する。中央に石囲炉、構築時期晩期初頭）	
	構築時期	環状列石内部・周辺から縄文晩期初頭～中葉の土器が出土している。	
	列石の状況	<p>平面形は不整形円形を呈し、長径約49m×短径約39mを測る。数個～十数個の山石を用いた配石遺構の集合体で、77基の配石遺構によって構成されている。配石は村越潔氏によってA～Eの6形態に分類されている。</p> <p>15基の配石下の調査が行なわれ2基より下部土坑が検出されている。</p> <p>また、列石内部の調査も行なわれ「緩かに凹んでいて、一見、盆状を成している」とあり、整地が行なわれたことを示唆している。（確認調査より）</p> <p>構築の際、台地を一度削平した後数度にわたり盛土を行いマウンド状にする。環状列石（配石）はこのマウンドの斜面に構築されている。配石下に土坑を確認できたものは新たに4基。</p>	
	遺構の配置	環状列石と竪穴住居跡は岩木山麓に形成された舌状台地に立地する。台地基部に住居跡、中央部に環状列石があり、平成20年度調査においては先端部から遺物廃棄域が検出されている。環状列石と竪穴住居跡の距離は約100m。	
	遺物	環状列石内部から、縄文土器片（晩期 大濶BC式・C1式）が出土。このほかに土俵、石剣、岩版、石冠などが出土しているが、円盤状石製品が圧倒的に多い。 列石外周からは大濶BC式のものが比較的多く出土。	
	性格		
その他	平成18年～20年度に、弘前市教委が国の指定準備のため確認調査を実施している。 大瀧ストーンサークル館平成19年度事業「縄文に学ぶ」発表資料も参考とした。		

小牧野遺跡

遺跡名	小牧野遺跡		
所在地	青森県青森市大字野沢字小牧野		
調査主体	青森山田高等学校考古学研究会 青森市教育委員会	調査年度	平成元年 平成2年～17年度
収録報告書	「小牧野遺跡発掘調査概報」 青森市教育委員会 平成5年 「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ～Ⅸ」 青森市教育委員会 平成8年～18年		
調査原因	学術調査		
調査概要	立地	八甲田山系から青森平野に向かって流れる荒川と入内川に挟まれた標高約145mの舌状台地に立地する。	
	検出遺構	環状列石1基、配石遺構14基、集石遺構5基、湧水遺構1基、堅穴住居跡6棟、土坑257基、小ピット181基、土器植篋4基、道路状遺構10箇所	
	構築時期	縄文後期前葉（十層内Ⅰ式）	
	配石の状況	環状列石は、中央帯・内帯・外帯の三重構造の円環状を呈するが、一部四重となる環状列石・直線状列石、外帯を囲むように配置された環状配石、内帯や外帯に付随した特殊組石などによって構成される。 規模は中央帯が径2.6m、内帯が径29m、外帯が径35mを測る。 川原石を縦横に繰り返した石垣状の配置の仕方は「小牧野式配列」と呼ばれている。 環状列石を構築する前に大規模な土地造成が行なわれている。	
	遺構の配置	環状列石外帯に沿って環状配石が配置され、外帯から伸びた石列によって区画されていることが確認される。湧水遺構は列石の東側約130mの斜面に、道路状遺構は列石の北側から確認されている。	
	遺物	十層内Ⅰ式のもの为主体を占める。次いでその前段階の釜沢3群・神附2式及びその中間型式の小牧野3期の時期のものが多い。 精神文化に関わる遺物が豊富で、土偶、鐔形土製品、三角形・円形岩版、有孔石製品などがある。特に三角形・円形岩版の出土量は他の遺跡を圧倒している。	
	性格		
その他			

湯舟沢環状列石

遺跡名	湯舟沢Ⅱ遺跡		
所在地	岩手県岩手郡滝沢村字湯舟沢		
調査主体	滝沢村教育委員会 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	調査年度	昭和57年・58年 平成2年
収録報告書	『湯舟沢遺跡』 滝沢村教育委員会 1986年 『湯舟沢Ⅱ遺跡』 滝沢村教育委員会 1991年 『湯舟沢Ⅱ遺跡 ストーンサークルの調査概要(脂肪酸分析)』 1992年		
調査原因	宅地開発に伴う事前調査		
調査概要	立地	岩手山の火砕流堆積によって形成された沼森山地北側の東麓部にあたり、諸葛川の支流の市兵衛川によって開析された兩岸の低地な、標高220m程の段丘面及び斜面に立地する。	
	検出遺構	環状列石(1条の弧状列石、2条の配石列によって構成)、竪穴住居跡、土坑100基以上、道路状遺構	
	構築時期	縄文後期前葉	
	列石の状況	1条の弧状列石、2条の配石列によって構成され、径約25m×20mの略楕円形を呈する。列石を縦断する配石列は11基の配石遺構で構成され、大型の礎が多く用いられたものが見受けられる。配石下に土坑を伴うものが多く、列石内には300以上の土坑が存在するのみと見られている。	
	遺構の配置	環状列石南東側20m地点から、竪穴住居跡群・土坑群が検出されている。	
	遺物	配石遺構内及びその周辺から縄文後期中葉の土器とともに、装飾品・土製円盤などが出土している。 遺跡保存のため遺構内部の調査は行われておらず副葬品については不明。	
	性格	集落と分離した「埋葬・祭祀の場」と考えられており、道路状遺構は墓道と考えられている。	
その他	環状列石の構築に係った集落については卯邊坂遺跡や湯舟坂XⅦ遺跡、環状列石の間連から50基以上の礎土遺構、配石群が検出された湯舟坂Ⅶ遺跡があり、Ⅶ遺跡は埋葬前の祭祀的な場としての役割を持っていたものと考えられている。		

御所野遺跡

遺跡名	御所野遺跡		
所在地	岩手県二戸郡一戸町時岩館字御所野		
調査主体	一戸町教育委員会	調査年度	平成15年度・18年度
収録報告書	「御所野遺跡Ⅰ 縄文時代中期の大集落跡」 一戸町教委 1993年 「御所野遺跡Ⅱ」 一戸町教委 2004年 「御所野遺跡Ⅲ」 一戸町教委 2006年		
調査原因	農村工業団地造成		
調査概要	立地	馬淵川右岸に位置し、河川が形成した狭い谷底平野から上った標高約200mの段丘上に立地する。	
	検出遺構	竪穴住居跡（東・中央・西集落）、環状列石、土坑（墓穴）、貯蔵穴、掘立柱建物跡	
	構築時期	縄文中期後葉～末葉	
	配石の状況	数形態に分類される。径1×2m程の楕円形に石を組み長軸の一端又は両端に立石をもつもの、打ち欠いた長方形板石に赤色顔料を塗布して立石としその周辺に川原石を配置するもの、長径2～5m程の楕円形状に石を配置するものなどがある。 東側の環状列石は9基以上の配石遺構で構成され、径約50mを測る。	
	遺構の配置	広く削平した中央地点の北側に東西に2基がつくられる。中央に広場を有し、これを核に墓穴（土坑墓）、配石、掘立柱建物が同心円状に分布する。 東側に位置するものは、中央に長径10数mの楕円形の広場を持つ。墓穴は長径1m程の小判形で、20基程で群をなしている。群数は10ヵ所程で、配石遺構はこの墓穴群の上につくられている。環状列石の南側に弧状を呈する盛土遺構、さらにその外側に竪穴住居群が分布する。	
	遺物	縄文中期中葉～末葉の円筒上層C式～d式土器、大木8a式～10式土器、椀林式土器が出土している。 土製品・石製品は多様で、後葉に爆発的に量を増すキノコ形土製品が出土している。	
	性格	配石遺構については墓の可能性が高いと考えられている。	
その他			

鷺ノ木遺跡

遺跡名	鷺ノ木遺跡		
所在地	北海道茅部郡森町字鷺ノ木503-4 ほか		
調査主体	森町教育委員会	調査年度	平成15年・16年度
収録報告書	「鷺ノ木遺跡 縄文時代後期前葉の環状列石と竪穴墓域」森町教育委員会 2008年		
調査原因	北海道縦貫自動車道建設に伴う発掘調査		
調査概要	立地	噴火湾に面する標高67m～73mの丘陵上に立地。	
	検出遺構	環状列石1基、竪穴墓域1基（内部に土坑11基が存在）、埋設土器1基 砂利集積、土坑、ピット、焼土跡	
	構築時期	縄文後期前葉（白坂3式）	
	列石の状況	外帯・内帯・中央帯で構成される。外帯は楕円形を呈し長軸約37m×短軸約34m、内帯の径は35.5m×33m、中央帯は4m×2.5mを測る。 外帯と内帯は扁平な川原石の長軸を連結するように配置され、所々に両帯を結ぶような石の配置もみられる。 なお、環状列石を構築する際、大規模な整地がされている。	
	遺構の配置	列石外帯の南東側に付随して埋設土器、列石の南西側に近接して「竪穴墓域」が位置する 竪穴墓域は楕円形を呈し、径11.5×9mを測る。内部からは11基の土坑が検出されている。時期は列石と同時期と考えられている。	
	遺物	環状列石に伴う遺物は少ない。 埋設土器は口縁部と底部を欠く環鉢形土器で縄文を地文とする。文様帯上部に鍵状文、下位に波状文、中位に渦巻文または波状入組文を描き、内部は磨り滑されている。後期前葉の白坂3式の所産と考えられている。 竪穴墓域の墓穴内より白坂3式土器が出土している。	
	性格	祭りの場である環状列石と埋葬の場である竪穴墓域が、後期前葉の土器型式にして1型式の年代幅の中で、機能を明確に分離・共存していたと考えられている。	
その他	隣接する「鷺ノ木4遺跡」からは、土坑群や石垣状配石遺構が確認、いかめしに似た埴輪土製品が出土している。土坑群は斜面に造られており、この斜面下に石垣状配石遺構が作られている。 なお、平成20年度の調査で、環状列石隣接地より同時期の竪穴住居跡が確認されている。		

忍路環状列石

遺跡名	忍路環状列石		
所在地	北海道小樽市忍路二丁目		
調査主体	小樽市教育委員会	調査年度	昭和26年 平成7年～12年
収録報告書	『音江 北海道環状列石の研究』 駒井和愛 慶友社 1959年 『忍路環状列石Ⅱ—忍路環状列石周辺地区遺跡詳細分布調査報告書—』 2001年 小樽市教委		
調査原因			
調査概要	立地	標高190m程の三笠山の西麓に位置する。遺跡は三笠山のふもとを流れる種吉沢川の左岸段丘、標高23～25m程の緩斜面を削平し作り出した平坦地に構築されている。	
	検出遺構	環状列石1基。 環状列石を中心に半径80mの範囲に土坑が確認されている。	
	構築時期	縄文後期中葉	
	列石の状況	列石は大型の立石（安山岩）の周辺に小石を配したものが連続して環状に巡る。南北33m×東西22mの楕円形を呈する。列石中央には3.7m×4m程の円形の石列、西側には張り出し状（出入り口施設）の配石がある。列石南東側は二重となっている。 昭和26年、駒井和愛氏が、列石内に「し字状」のトレンチを入れているが、遺構・遺物は確認されていない。	
	遺構の配置	詳細分布調査によって列石と係りのある配石遺構が北西側に広がる可能性があること、柱穴や土坑が分布する。	
	遺物	平成7年～12年の周辺詳細分布調査では縄文後期中葉（手摺式・ほけま式）の土器が出土している。 十腰内Ⅱ式に伴う多量沈線文土器や浮き彫り的な手法を使用した注口土器が出土	
	性格		
その他	・列石の西側には環状列石と密接な関係があったと考えられる低湿地遺跡「忍路土場遺跡」があり、ウッドサークルと思われる木柱が検出されている。		

第Ⅶ章 本調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、野中堂、一本木後口に所在する。遺跡は、検出遺構や出土遺物などから、縄文時代早期から平安時代までの長い期間にわたって営まれていることが判明している。遺跡の全盛期である縄文時代後期前葉には、配石墓の集合体である万座・野中堂の2つの環状列石を中心に、建物跡や配石遺構群などのさまざまな遺構が構築され、大規模な「マツリと祈りの場」として利用されていたことが明らかとなっている。

今年度の調査区は、史跡の南側に位置するH₂区が対象となった。このH₂区は、昨年度第24次調査が行われたH₁区の南側隣接地にあたる。H₁区では、野中堂環状列石の南側で確認されていた「野中堂配石遺構群」と関連した配石遺構が検出されており、「野中堂配石遺構群」の分布が野中堂環状列石の出入り口から南に直線状に配置されていることから、今年度の調査で新たに配石遺構群が確認される期待が高まっていた。

しかし、調査の結果、今年度の調査区内からは配石遺構は検出されず、焼土遺構などの遺構も確認されなかった。このことから、「野中堂配石遺構群」の分布はH₁区までにとどまることが確認された。

また、これまでの調査結果から、環状列石から離れるに従い、遺物の出土量は減少する傾向が予想されていたが、今年度の調査で出土した遺物は、縄文土器破片103点ときわめて少なく、遺跡の中心は2つの環状列石というこれまでの認識を裏付けるものとなった。

昭和59年度に始まった鹿角市教育委員会による調査は、今年度で25年目を迎えた。四半世紀という長い時間をかけて行われた調査では、環状列石だけでなく、その周辺に構築され、営まれた遺構についても新たな発見が多くあった。これらの発見は、縄文時代の精神文化を解明するための手がかりとして、他遺跡の調査にも少なからず影響を与えてきたといえる。今年度の調査で当初予定されていた史跡範囲をひととおり終え、史跡内の調査については第25次で一度休止することとなる。しかし、大湯環状列石についての調査・研究については、これからが本番である。途絶えることなく毎年集められたデータは、平成10年から始められている環境整備にその都度反映されてきている。今後は、25年間積み上げられてきた莫大な量のデータを整理し直し、残されてきた課題の解明を進めていくことで、大湯環状列石を全体として再構築することが求められている。

大湯環状列石関係文献目録

- 昭和6年(1931) 武藤一郎「鹿角郡大湯町に於ける遺跡の研究」『秋田考古会々誌』2-5
- 昭和21年(1946) 甲野 勇「巨石遺物」『科学朝日』第6巻第12号
- 昭和22年(1947) 甲野 勇「ストーン・サークル後記」『科学朝日』第7巻第11号
甲野 勇「大湯だより」『あんとろぼす』第2巻第1号
- 昭和28年(1953) 文化財保護委員会『大湯環状列石』
- 昭和41年(1966) 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四火山屑物と段丘地形」
『地理学評論Vol. 39』
- 昭和43年(1968) 阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』54巻1号
水野正好「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』第20巻第4号
- 昭和44年(1969) 小坂町教育委員会『小坂環状列石墳墓』
- 昭和45年(1970) 内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」
『地理学評論Vol. 43』
- 昭和46年(1971) 江坂輝編「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』第3号
奥山 潤「秋田県北鹿地方の縄文配石墳墓」『北奥古代文化』第3号
斉藤 忠「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」
『北奥古代文化』第3号
- 昭和48年(1973) 諏訪富多『特別史跡大湯環状列石発掘史』大湯郷土研究会
- 昭和49年(1974) 秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会
『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』
- 昭和50年(1975) 浅井末吉『遺蹟巡礼日記』大湯郷土研究会
安保 彰『小坂のあけぼの』
秋田県教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概要』
- 昭和51年(1976) 林 謙作「縄文期の集落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡概要』
- 昭和52年(1977) 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』
林 謙作「縄文期の葬制・第Ⅱ部」『考古学雑誌』第63巻第3号
辻誠一郎「秋田県玉川温泉地域の沖積世鹿湯層の花粉分析」
『東北地理29-3』

- 昭和53年(1978) 富樫泰時「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『ドルメン』
鹿角市・鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石保存管理計画書』
- 昭和54年(1979) 葛西 励「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号
林 謙作「縄文期の集落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号
- 昭和55年(1980) 林 謙作「東日本縄文期葬制の変遷(予察)」『人類学雑誌』第88巻第3号
岩手県教育委員会『西田遺跡』
- 昭和56年(1981) 成田滋彦「青森県の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- 昭和57年(1982) 大里勝藏・秋元信夫他「縄文時代」『鹿角市史』鹿角市
- 昭和58年(1983) 阿部義平「配石」『縄文文化の研究9』雄山閣
- 昭和59年(1984) 鈴木保彦「集落の構成」『李刊考古学』第7号 雄山閣
林 謙作「縄文集落 集落論の新しい出発をめざして」第7号 雄山閣
水野正好「ストーンサークルの意義」『李刊考古学』第9号 雄山閣
- 昭和60年(1985) 江坂輝彌「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No254
ニュー・サイエンス社
斉藤 忠「配石遺構一特に環状列石について」No254
ニュー・サイエンス社
富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題」『よねしろ考古』第1号
富樫泰時「日本の古代遺跡 24 秋田県」保育者
村田文夫「縄文集落」考古学ライブラリー18 ニュー・サイエンス社
本間 宏「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」
『よねしろ考古』第1号
秋元信夫「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古』第1号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』
- 昭和61年(1986) 阿部義平「日時計の考察—大湯環状列石の配石類型の意味—」
『よねしろ考古』第2号
秋元信夫「秋田県の配石遺構」『よねしろ考古』第2号
林 謙作「マツリと記念物」『発掘が語る日本史1』新人物往来社
鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(2)』
- 昭和62年(1987) 村越 深「北東北の葬制」『よねしろ考古』第3号
富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題(2)」『よねしろ考古』第3号
本間 宏「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』第3号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』

- 塚原正典「配石遺構」『考古学ライブラリー49』ニュー・サイエンス社
- 昭和63年(1988) 本間 宏「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』第4号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』
- 平成元年(1989) 石井 寛「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第6冊
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』
- 平成2年(1990) 鎌田健一「有史時代に降った十和田火山起源の火山灰について」
『よねしろ考古』第6号
成田紀彦「大湯環状列石周辺遺跡の古環境」『よねしろ考古』第6号
秋元信夫「環状列石と建物跡」『よねしろ考古』第6号
藤井安正「大湯環状列石周辺遺跡の配石遺構群について」
『よねしろ考古』第6号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)』
- 平成3年(1991) 林 謙作「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古』第7号
鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(7)』
- 平成4年(1992) 秋元信夫「大湯環状列石—精神性を窺った墓域—」
『歴史読本9月号』新人物往来社
鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(8)』
鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』
- 平成5年(1993) 小林達雄「縄文時代の集落」『李刊考古学44』雄山閣
富樫泰時「縄文集落の変遷」『李刊考古学44』雄山閣
山本禪久「竪穴住居の形態」『李刊考古学44』雄山閣
林 謙作「大湯環状列石の配石墓(2)」『よねしろ考古』第8号
小畑 巖「高屋館跡の環状列石」『よねしろ考古』第8号
鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)』
- 平成6年(1994) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(10)』
- 平成7年(1995) 小林達雄「縄文時代の自然の社会化」『李刊考古学 別冊6』雄山閣
富樫泰時「秋田県大湯遺跡」『李刊考古学 別冊6』雄山閣
鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)』
鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画』
- 平成8年(1996) 小林達雄「縄文人の世界」朝日選書557 朝日新聞社
鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(12)』

- 平成9年(1997) 岡村道雄「ここまでわかった日本の先史時代」角川書店
 小林 克「東北地方北部縄文時代の葬制」『考古学ジャーナル422』
 ニュー・サイエンス社
 秋元信夫・藤井安正・花海義人「遺跡は語るNo. 21～36」さきがけ新報社
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(13)』
- 平成10年(1998) 小林達雄他「縄文時代の考古学」学生社
 浅川滋男編「先史日本の住居とその周辺」
 『奈良国立文化財研究所シンポジウム』同成社
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(14)』
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本設計説明書』
- 平成11年(1999) 秋元信夫「縄文人の思惟と自然—東北の環状列石を中心に—」
 『ブナ林の民俗』高志書院
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(15)』
 柳沢兌衛『東アジアの古代文化99号』大和書房
- 平成12年(2000) 秋元信夫「大湯環状列石のここがみどころ」
 『全国訪ねてみたい古代遺跡100』成美堂出版
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(16)』
- 平成13年(2001) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(17)』
 林謙作「大湯環状列石の配石墓」『縄文社会の考古学』同成社
 鈴木克彦『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 平成14年(2002) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(18)』
- 平成15年(2003) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(19)』
 藤井安正「特別史跡大湯環状列石の保存と活用」『日本歴史』第661号
- 平成16年(2004) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(20)』
 富樫泰時「秋田だより」『考古学研究』第51巻第1号(通巻201号)
 塩谷順耳「秋大史学創刊のころ」さきがけ新報社
 大湯ストーンサークル館『大湯ストーンサークル館 展示図録』
 藤井安正他『秋田の史跡・考古』秋田県教育委員会
- 平成17年(2005) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(21)』
 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石(I) 遺構編』
 藤井安正「遺跡発掘リポート2005」さきがけ新報社
 秋元信夫『石にこめた縄文人の祈り 大湯環状列石』新泉社

松本直子『縄文のムラと社会』 岩波書店

古屋敷則雄「環状列石の設計図を求めて」『北奥の考古学』

葛西励先生遺稿記念論文集刊行会

秋元信夫「秋田県大湯環状列石」『縄文ランドスケープ』

㈱アム・プロモーション

平成18年(2006) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)』

斎藤 忠『大湯環状列石は語る』 よねしろ考古学研究会

平成19年(2007) 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)』

鈴木克彦『日本のストーン・サークル眺望』

「季刊 考古学 第101号」 ニュー・サイエンス社

武藤祐浩『北日本のストーン・サークル 秋田県の諸遺跡』

「季刊 考古学 第101号」 ニュー・サイエンス社

藤井安正 巻頭口絵「季刊 考古学 第101号」 ニュー・サイエンス社

金関 恕・岡村道雄・早川和子・藤井安正『よみがえる日本の古代』小学館

宮尾 亨「環状列石の造営」『縄文時代の考古学Ⅱ』小杉康ほか編 同成舎

小林 克「環状列石(東北・北海道地方)」『縄文時代の考古学Ⅱ』

小杉康ほか編 同成舎

平成20年(2008) 斎藤 忠「大湯ストーンサークルの調査」

『斎藤忠著作選集 続2 日本考古学の課題』 雄山閣

小林達雄『縄文人追跡』 ちくま書房

小林達雄『縄文の思考』 ちくま書房

鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(24)』

インテリジェント・リンク『世界遺産をめざす15遺跡 縄文遺跡ガイド』

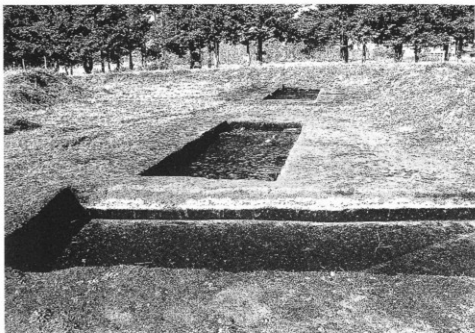
藤井安正 「大湯環状列石」『決定版 日本の古墳・古代遺跡』学習研究社

すべての報告書、研究論文、冊子などを網羅していません。

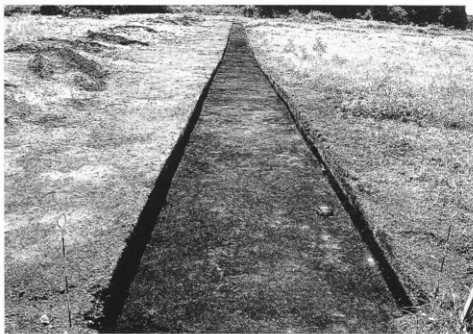
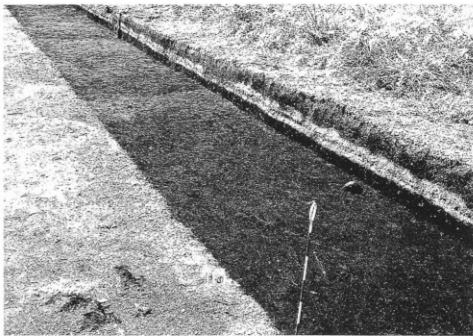
このほかに掲載されたものがありましたらご一報ください。



PL 1 調査区西側トレンチ



PL 2 調査区西側・中央トレンチ



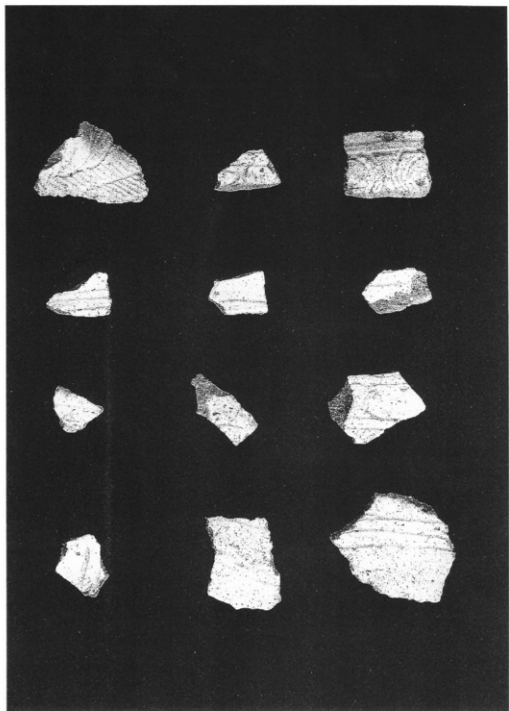
PL 3 調査区東側トレンチ



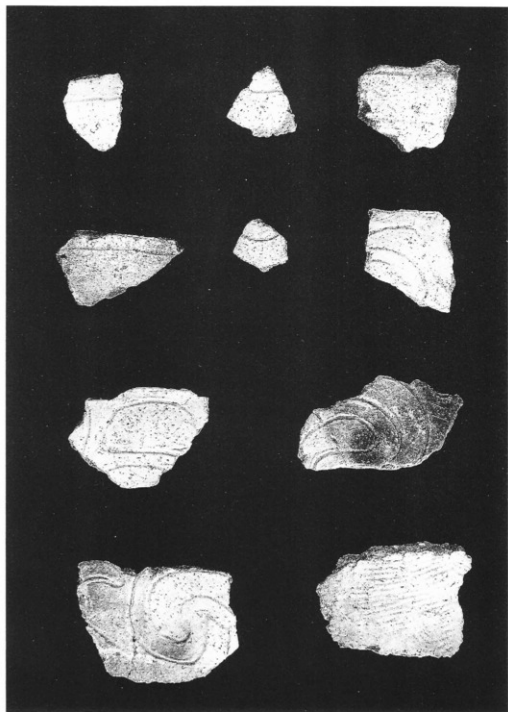
PL 4 遺物出土状況



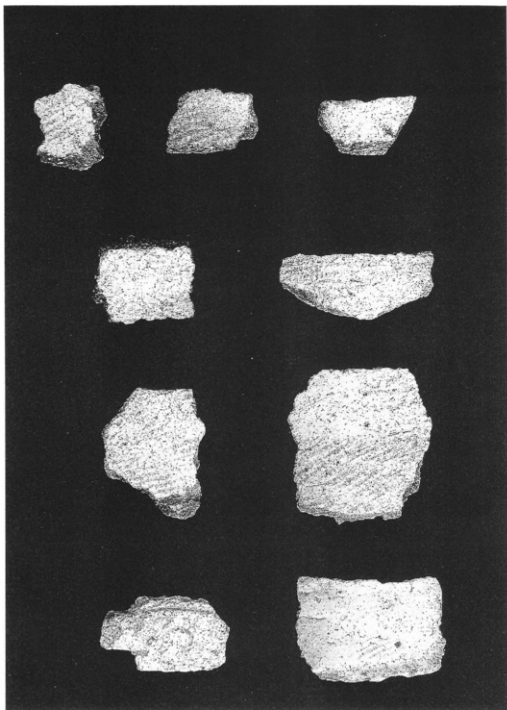
PL 5 作業風景



PL 6 出土遺物(1)



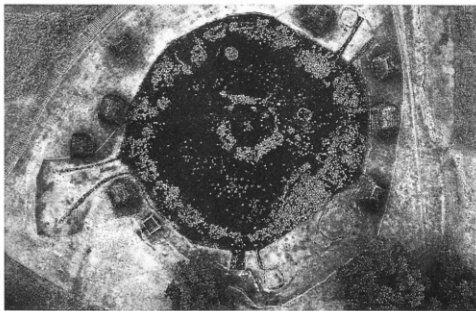
PL 7 出土遺物 (2)



PL 8 出土遺物 (3)



昭和 26 年調査



万座環状列石上空

PL 9 大湯環状列石



天戸森遺跡配石遺構



高屋館跡

PL10 天戸森遺跡・高屋館跡

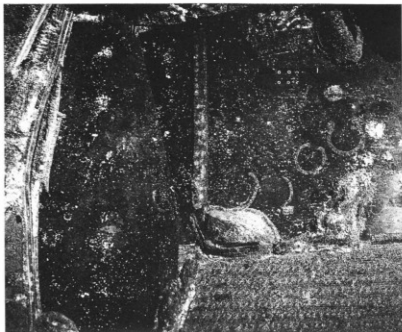


伊勢堂岱遺跡

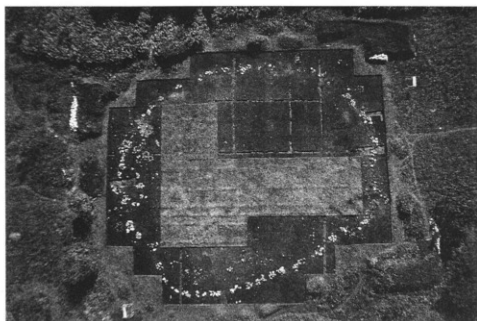


湯舟沢環状列石

PL11 伊勢堂岱遺跡・湯舟沢環状列石

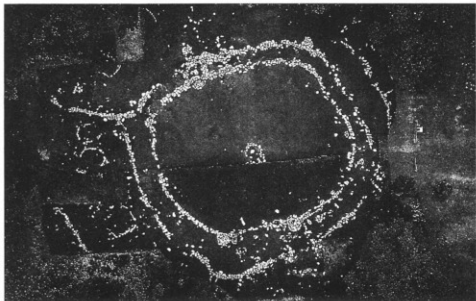


御所野遺跡

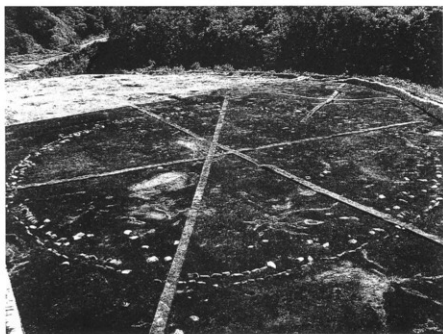


大森勝山遺跡

PL12 御所野遺跡・大森勝山遺跡



小牧野遺跡

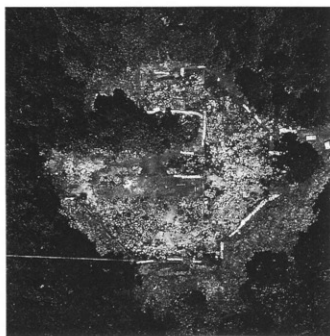


鷺ノ木遺跡

PL13 小牧野遺跡・鷺ノ木遺跡



忍路環状列石



太師森遺跡

PL14 忍路環状列石・太師森遺跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき おおゆかんじょうれっせき はくつちょうさほうこくしょ							
書 籍 名	特別史跡 大湯環状列石 発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次	25							
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	96							
編 著 者 名	鹿角市教育委員会（生涯学習課）							
編 集 機 関	鹿角市教育委員会（生涯学習課）							
所 在 地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1							
発 行 年 月 日	西暦2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	2008. 7.15 ?	11,470㎡ 11.18	学術調査(環 境整備事業 に伴う発掘 調査)
所収遺跡名	種 別	主な時代						特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代 後期前葉～中葉						野中堂環状 列石の南端 を対象に調 査。
要 約	<p>史跡南端を調査。地形やこれまでの配石遺構の検出立地を考慮しトレンチを設定し、遺構の有無を確認するとともに、ボーリング探査で配石遺構の有無を確認した。</p> <p>単独での石を確認するが、石の集合体である配石遺構は確認できなかった。また、環状列石から離れるに従い遺構・遺物の分布密度は希薄になることが判明した。しかし、聞き取り調査によって史跡南端の調査区外に配石遺構と思われる石の集合体があったとの情報を得た。</p> <p>昭和59年度に開始した発掘調査については本年度の第25次調査をもって一端休止することとした。</p>							

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書 (25)

発行年月日 平成 21 年 3 月 31 日

発行者 鹿角市教育委員会

〒018-5292

秋田県鹿角市花輪字荒田 4 番地 1

電話 0186-30-0294(生涯学習課直通)

印刷所 株式会社 大館印刷
